

2020(令和2)年度

障害者スポーツを取巻く 社会的環境に関する調査研究

— 障害者スポーツ選手キャリア、コロナ禍の影響、ユニ★スポ体験の効果、に注目して —



第1章

障害者スポーツ選手の
キャリア調査



第2章

コロナ禍における
アスリートの活動状況調査



第3章

ユニ★スポ体験での
児童の意識変容調査



はじめに

YMFS 調査研究

障害者スポーツ・プロジェクト・リーダー

藤田紀昭

歴史的な一年だった。開催予定であった東京オリンピック・パラリンピックが延期され、人々は不要不急の移動や会合の自粛が求められ、感染の不安と将来への不安にさいなまれた一年であった。この報告書が出される 2021 年 3 月にどのような状況になっているのか誰も予想できない。ビッグイベント開催の意味や意義、スポーツの価値、スポーツ推進の目的、オリンピック・パラリンピックのレガシーとは何かなど、様々な問いかけがスポーツ界になされてきた一年でもあった。

しかし、こうした状況下だからこそ「スポーツを通じて幸福で豊かな生活を営むことは、全ての人々の権利であり、全ての国民がその自発性の下に、各々の関心、適性等に応じて、安全かつ公正な環境の下で日常的にスポーツに親しみ、スポーツを楽しみ、又はスポーツを支える活動に参画することのできる機会が確保」（スポーツ基本法前文）することを考えたい。なぜなら、体を動かす機会が減り、人とのつながりが持ちづらくなっている今だからこそ、健やかで明るく豊かな生活を享受するためにスポーツの果たす役割が期待されると考えられるからである。特に、障害のある人のスポーツ実施率はない人に比べ低い。また、感染すれば重篤化しやすいと言われている。安全を担保しつつも、障害者のスポーツ推進の歩みを止めてはならない。

本研究プロジェクトも障害者スポーツの推進に貢献することを大きな目的としており、同様に歩みを止めることなく進んでいきたい。本来ならば、パラリンピック開催に伴う各種メディアの報道の状況や、選手の社会的認知度、パラスポーツを支援する企業の状況などに関する調査を実施するはずであったが、これらについてはパラリンピック開催後に行うものとして今年度は実施しなかった。今年度はパラスポーツ選手のキャリア調査、2020 年のパラスポーツ選手の活動の実態調査、および、相互理解促進と共生社会実現への寄与と位置づけられる「チャレンジ！ユニ★スポ」に参加した児童生徒の意識の変化についての調査を実施した。

本報告書の第 1 章はパラスポーツ選手のキャリア調査の報告をしている。これは障害のある選手がどのようにしてスポーツを始めるに至ったかを明らかにするものである。調査

結果を蓄積し、その特徴を明らかにし、障害のある人がスポーツにアクセスしやすい環境づくりに役立てようとするものである。昨年度の9名に続き、今年度は13名の選手のインタビューを実施した。今年度はリモートによるインタビューとなった。その結果、中途障害の選手の場合、病院やリハビリテーションセンター等の医療関係者や社会福祉協議会等の福祉関係者から、障害者スポーツに関する情報提供を受けるケースが多いことがわかった。また、先天的障害者の場合は学齢期の体育やスポーツ経験がその後のスポーツ活動の開始に大きな影響を及ぼしていることが明らかになってきた。この調査に関しては次年度以降も様々な障害種の選手に調査をお願いして、結果を精度化し、障害のある人へのスポーツ普及に結び付けていきたい。

第2章は2020年度のパラスポーツ選手の活動の実態調査の結果を報告している。緊急事態宣言が発出されていた期間の過ごし方について、日常生活、目標設定、メンタルコントロール、トレーニング方法、感染防止のための対応方法、行動の仕方などを調査した。慎重すぎるほど慎重に行動しつつも、パラリンピックに向けて懸命に努力している選手の姿を見出すことができた。なお、この調査は選手のキャリア調査のためのインタビューの中で聞き取ったものである。

第3章は「チャレンジ！ユニ★スポ」に参加した児童生徒の意識の変化および、このイベント実施にあたって工夫した感染対策について報告している。この調査には1000人を超える児童生徒の皆さんに協力していただいた。「チャレンジ！ユニ★スポ」は着実に児童生徒の心に届き、ポジティブな意識の変化があったことが明らかになった。また、イベント実施の際行われた感染予防対策が紹介されている。今後、地域での各種イベントを実施する際の参考になるとと思われる。

障害者スポーツの推進を止めないために私たちプロジェクトメンバーも慣れないリモート会議やインタビューなどを行い、今回の報告となった。実際に会って打ち合わせができなかったこともあり、調査の細かな内容等に不十分な点があると考えられる。

	2012(H24)	2013(H25)	2014(H26)	2015(H27)	2016(H28)	2017(H29)	2018(H30)	2019(R1)	2020(R2)
大学における障害者SPの現状	○		○		○	○	○	○	
パラリンピアンスポーツキャリア		○							
障害者スポーツ選手のスポーツキャリア								○	○
コロナ禍におけるアスリート活動状況									○
パラリンピック指導者の現状		○							
障害者スポーツ競技団体活動		○					○		
障害者SP選手発掘育成システム			○						
パラリンピアン社会的認知度			○		○		○		
ジャパパラ選手のスポーツキャリア				○					
パラリンピックTV放送					○				
地域現場の実態						○	○	○	
障害者SP関連CF状況						○			
チャレンジ！ユニ★スポケーススタディ								○	○

ご指摘、ご批判があればぜひ、お知らせいただきたい。最後に、大変な社会状況の中、ご協力いただいた選手、児童生徒の皆さん、教員他の皆様に心よりお礼申し上げます。ありがとうございました。

■目次

はじめに	1
第1章 障害者スポーツ選手のキャリア調査	5
第2章 コロナ禍におけるアスリートの活動状況調査	61
第3章 ユニ・スポ体験での児童の意識変容調査	71
付録 ユニ・スポ調査票	98

■ 障害者スポーツ・プロジェクト

リーダー	藤田紀昭	日本福祉大学スポーツ科学部	教授
メンバー	小淵和也	(公財) 笹川スポーツ財団スポーツ政策研究所	政策ディレクター
	河西正博	同志社大学スポーツ健康科学部	助教
	齊藤まゆみ	筑波大学体育系	准教授
	中森邦男	(公財) 日本障がい者スポーツ協会 日本パラリンピック委員会	参事
監修	浅見俊雄	東京大学・日本体育大学 (公財) ヤマハ発動機スポーツ振興財団	名誉教授 理事
事務局	大庭義隆	(公財) ヤマハ発動機スポーツ振興財団	

第1章

障害者スポーツ選手のキャリア調査

本調査は昨年度から開始しており、選手一人ひとりの個人史ならびにスポーツキャリアに関わるインタビューを実施し、どのような環境、支援、他者との関わりの中でスポーツを始め、継続しているのかについて検討している。今年度は13名の選手に協力をいただき、オンラインもしくは対面で1時間30分程度インタビューを実施した。なお、事前に調査目的、個人情報管理、調査の任意参加、調査協力を中止しても不利益が生じないこと等の同意を得た上で調査を実施した。協力いただいた選手は、男性10名、女性3名で、先天性障害4名、中途障害9名、年齢は23歳～65歳（平均40.3歳）であった。主な質問項目は、基本的属性、競技歴、障害発生から障害者スポーツ開始までの経緯、受傷前のスポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響、障害者スポーツ開始に影響を与えた社会的状況・環境・条件、受傷前のスポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響、障害者スポーツ継続に関する状況、スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件、今後のスポーツ実施意向等である。

なお、本調査は日本福祉大学「人を対象とする研究」に関する倫理審査委員会の承認（申請番号18-11）を受けて実施した。また、調査にあたっては、日本福祉大学スポーツ科学部の安藤佳代子助教ならびに兒玉友助教の協力を得た。主な報告概要は次のとおりである。

調査結果より、それぞれのスポーツ開始の局面に着目すると、中途障害の選手を中心に病院やリハビリテーションセンター等の医療職や社会福祉協議会等の福祉職から、障害者スポーツに関する情報提供を受けるケースが多いことがわかる。また、リハビリテーションセンターで知り合った選手からの紹介で競技を始めたというケースがあり、同じ境遇の人々との出会いもその後のスポーツ参加を促進させる要因になるものと考えられる。

また、先天性障害の選手に関しては、学齢期の体育やスポーツ経験がその後のスポーツ活動の開始に大きな影響を及ぼすものと考えられる。本調査で先天性障害のある選手は4名と少数に留まっており、今後さらなる調査が必要となるが、4名のうち2名は小学校から普通学校に通学しており、体育は他の児童生徒と同様に行い、中学校進学後は運動部活動に加入していた。しかしながら、他の2名については学校体育に十分に参加できず、特別支援学校中学部に進学後、もしくは学校卒業後に医療職の紹介で現在の競技を開始している。校種を問わず、前者のように幼少期からスポーツに触れる機会があれば、その後よりスムーズにスポーツキャリアを積み重ねていくことができるのではないだろうか。その一方で、後者のように学齢期に十分に体育やスポーツに触れられない環境に置かれてしまうと、本調査対象者は結果としてスポーツに取り組むことができているが、その後自発的にスポーツにアクセスすることが難しくなってしまうのではないだろうか。「(子どもの頃

に) スポーツはしてはいけないと思っていた。」「(周囲に)『足が悪い』ということだけを伝えており、皆の前で義足を見せることや外すことは絶対にせず、それを悟られないためにも体育に参加しないと自分の中で決めていた。」という両者の言葉が当時の体育、スポーツ参加の困難性を象徴していると言える。先天性障害もしくは幼少期から障害のある人々にとって、学校体育や運動部活動等の活動は単にスポーツキャリアの形成だけではなく、自身の障害受容や自己肯定感の涵養にも影響するものと考えられ、今後詳細に検討していくことが必要であると考えられる。

もう1点、スポーツ開始から継続へとつながるプロセスで重要となるのが、種目ごとのクラブやチームの存在であり、調査対象者の多くが地元もしくは近隣地域の障害者クラブに所属をしてその後の競技継続へとつながっている。同じ立場の人々が競技をしている姿を目の当たりにすることで、自分自身のその後のスポーツキャリアを描きやすくなり、その後の積極的なスポーツ参加へとつながっているのではないだろうか。

また、スポーツ継続に影響を与えている要因として注目されるのが「アスリート雇用」の存在である。調査対象者の中で、国際レベルで競技に取り組んでいる現役選手のうち、複数名がアスリート雇用に転換し、競技に専念できる環境となっており、転職、転籍等を経ない選手についても職務減免や職場の理解によって競技を継続している。パラリンピックを頂点とした障害者スポーツの高度化に伴って、国際大会への参加や海外遠征等が増加し金銭的な負担が増加していく中で、「所属先からの支援が重要」との声が多く選手から挙がっていた。調査結果より、アスリート雇用への転換や職場の理解、各種支援は東京2020オリンピック・パラリンピックの開催(2021年に延期予定)が決定した2013年以後に進んできており、パラリンピック開催に向けた障害者スポーツへの認知度の向上、関心の高まりが影響しているものと考えられる。

(河西正博)

■ キャリア調査インタビュー一覧（昨年度実施分含む）

※パラスポーツ開始時の競技と現在の競技が違う場合は最初の競技開始時について記載
 ※一般雇用には障害者雇用を含む
 ※19-A～19-I は昨年度報告書に記載の選手

項目	19-A	19-B	19-C
調査年度	2019	2019	2019
通し番号	1	2	3
生まれた年	1967	1978	1956
性別	男	男	男
居住地域	東海	東海	東海
調査時身分	一般雇用	一般雇用	一般雇用
障害発生年齢	24	15	25
障害内容	肢体不自由	肢体不自由	肢体不自由
障害程度	重度	中度	重度
学校種別	普通学校	普通学校	普通学校
現在実施競技	水泳	陸上競技	パラアイスホッケー
競技開始年齢	27	25	25
競技レベル	国際大会出場	国際大会出場	国際大会入賞
パラスポーツ開始時の重要な他者	・リハセン指導員 ・看護師（妻）	・義肢装具士 ・クラブメンバー	・リハセン指導員
パラスポーツ開始場所	・リハセン	・障害者スポーツセンター ・地元陸上競技場	・リハセン
パラスポーツ情報提供者	・リハセン指導員	・義肢装具士	・リハセン指導員
パラスポーツ開始場所へのアクセス	・入院時のため特に必要なし	・義肢装具士	・入院時のため特に必要なし
パラスポーツ開始前のスポーツの影響	・ポジティブ	・ポジティブ	・ポジティブ
パラスポーツ継続時の重要な他者	・妻 ・チームメンバー	・義肢装具士 ・陸上仲間 ・妻	・妻 ・仲間 ・監督・コーチ
パラスポーツ継続状況	妻やチームメンバーの介助を受け週2回程度。近くのバリアフリープールで	夕方まで仕事をし、その後練習。帰宅は22時、23時。自宅近くの陸上競技場が拠点。車で移動。	週末早朝に長野県に出向き練習。この競技をなくしたくないという思いが強い。
支援	・勤務先・公的機関	・公的機関	・勤務先・公的機関
将来ビジョン	生涯現役	健常者の記録にどれだけ近づけるか。障害者スポーツの環境整備に貢献したい。	次世代の育成、競技普及にかかわりたい。指導者は目指していない。
その他特記事項	水泳はパラリンピアンへの講演をきっかけに開始した。	パラリンピック出場経験あり。地元で講演を年間40～50ほどこなしている。	意外と経済的負担が大きいため若手が育たないのではないかと考えている。パラリンピックメダリスト。

*1 子どもの時から他スポーツもしていたが、進行性の障害のためパラスポーツを競技として始めたのがこの年齢である

項目	19-D	19-E	19-F
調査年度	2019	2019	2019
通し番号	4	5	6
生まれた年	1996	1976	1976
性別	男	男	男
居住地域	東海	東海	東海
調査時身分	選手雇用	一般雇用	一般雇用
障害発生年齢	0	0	28
障害内容	肢体不自由	肢体不自由	肢体不自由
障害程度	重度	重度	重度
学校種別	普通学校	普通学校	普通学校
現在実施競技	卓球	陸上競技	車いすフェンシング
競技開始年齢	11	40 *1	28
競技レベル	国際大会出場	国内大会上位	国際大会出場
パラスポーツ開始時の重要な他者	・母 ・母の友人 ・障害者卓球クラブ監督	・家族 ・地元パラリンピアン	・妻
パラスポーツ開始場所	・福祉会館（障害者卓球クラブ）	・発掘事業	・県総合福祉センター （車いすバスケットボールクラブ）
パラスポーツ情報提供者	・母親の友人（障害児を持つ）→母親	・メディア	・妻 ・メディア（リアル）
パラスポーツ開始場所へのアクセス	・母親	・本人	・本人
パラスポーツ開始前のスポーツの影響	・なし	・ポジティブ	・ポジティブ
パラスポーツ継続時の重要な他者	・弟（同じ障害を持つ選手） ・中学卓球部顧問 ・車いす卓球の師匠 ・練習相手としての父	・妻 ・仲間 ・監督 ・トレーナー	・妻 ・練習相手（健常者）
パラスポーツ継続状況	小学校で障害児卓球クラブで卓球を始め、中高と卓球部に所属。顧問の理解やバリアフリーの体育館があったことが幸いした。弟と切磋琢磨。	公務員となり生活が安定したことが継続の要因の一つ。毎週末に練習大会。海沿いの堤防で練習。	現在練習中心の生活。アスリート雇用と同じ条件。地元高校や近県大学で練習。
支援	・勤務先・スポンサー・公的機関	・なし	・勤務先
将来ビジョン	2020後も現役続行。引退後は講演などをしてほしい。経験を下の世代に伝えたい。	仕事と両立させながらどこまでできるか考えたい。競技成績が上がるのが動機づけている。	2020でメダルを取りたい。いつ引退するかは考えていないが何らかのスポーツに関わりたい。
その他特記事項	最初は公務員だったが、練習環境を求めてアスリート雇用になった。15年に弟は死去。	普通学校教員がパラスポーツ情報を知っていたらもっと早く始められたかもしれない。	28歳で車いすバスケットボール、30歳で車いすテニス、39歳で車いすフェンシングを始めた。上位入賞できる条件を考えて競技変更。

項目	19-G	19-H	19-I
調査年度	2019	2019	2019
通し番号	7	8	9
生まれた年	1969	1969	1971
性別	男	男	男
居住地域	東海	東海	東海
調査時身分	一般雇用	選手雇用	一般雇用
障害発生年齢	28	36	21
障害内容	肢体不自由	肢体不自由	肢体不自由
障害程度	軽度	中度	重度
学校種別	普通学校	普通学校	普通学校
現在実施競技	アーチェリー	射撃	水泳
競技開始年齢	29	36	23
競技レベル	国際大会出場	国際大会出場	国際大会入賞
パラスポーツ開始時の重要な他者	・会社の知り合い	・病院の教授	・友人（水泳） ・メディア ・後輩（PT）
パラスポーツ開始場所	・地元企業の倉庫（健常チーム）	・ゴルフ練習場	・地元スイミングクラブ（父親が所属）
パラスポーツ情報提供者	・会社の知り合い	・病院の教授	・後輩（PT）
パラスポーツ開始場所へのアクセス	・会社の知り合い	・本人	・本人
パラスポーツ開始前のスポーツの影響	・ポジティブ	・ポジティブ	・ポジティブ
パラスポーツ継続時の重要な他者	・家族 ・クラブの仲間	・妻 ・病院の教授	・受傷前からの水泳仲間 ・家族
パラスポーツ継続状況	現在健常者クラブと障害者クラブ（理事・強化担当）に所属。障害者の大会ではクラスがなくなったためパラリンピックに出場できない。国際大会に帯同している。	労災のため経済基盤は安定している。受傷後ゴルフをはじめいくつか競技をしたが、16年発掘事業に参加し、射撃を始めた。射撃はかなり費用がかかる。	週に4～5日、一般のスイミングクラブで子どもたちに水泳を指導しつつ自分の練習を行っている。
支援	・なし	・なし	・なし
将来ビジョン	今後も健常、障害者両クラブに所属しアーチェリーを継続したい。	東京2020パラリンピック後どうなるか不安。日本障害者スポーツ射撃連盟が存続できるようにしたい。	東京2020パラリンピックに向けて取り組む。選手として、コーチとして今後も水泳を続けていく。
その他特記事項	国際大会チーム監督として帯同。クラス分けの厳密化によりパラリンピックでのクラスがなくなる。健常者クラブにも所属。	2018年フランスワールドカップに監督として参加。	受傷前から水泳をしており、高校総体や国体にも出場していた。

項目	20-A	20-B	20-C
調査年度	2020	2020	2020
通し番号	10	11	12
生まれた年	1981	1975	1973
性別	女	女	男
居住地域	関東	関東	九州
調査時身分	一般ののち選手雇用	選手雇用	一般雇用
障害発生年齢	13	0	0
障害内容	肢体不自由	肢体不自由	肢体不自由
障害程度	中度	重度	重度
学校種別	普通学校	普通学校	普通学校
現在実施競技	水泳/トライアスロン	アルペンスキー	アーチェリー
競技開始年齢	26	26	21
競技レベル	国際大会入賞	国際大会入賞	国内大会上位
パラスポーツ開始時の重要な他者	・パラ水泳コーチ	・義肢装具士	・ロス五輪オリンピック(ネロリ・フェアホール) ・療育センター職員
パラスポーツ開始場所	・フィットネスクラブ	・スキー場 (チェアスキー教室)	・障害者スポーツセンター
パラスポーツ情報提供者	・メディア (インターネット)	・義肢装具士	・テレビ ・療育センター職員
パラスポーツ開始場所へのアクセス	・本人	・本人	・本人
パラスポーツ開始前のスポーツの影響	・ポジティブ	・なし	・なし
パラスポーツ継続時の重要な他者	・会社のCSR ・会社の社長 ・サラ・レイナートセン選手 ・トライアスロンコース仲間	・アメリカ人コーチ	・地元アーチェリークラブの存在 ・妻
パラスポーツ継続状況	2008年～水泳、2013年～トライアスロン。 2019年から会社の支援を得て、競技活動＝業務となった。競技継続には会社の理解が大きい。	2009年からアメリカを拠点として北京パラを目指している。	地元パラアーチェリークラブで活動。役職も務めている。選手雇用でないため遠征費とかは出ないが遠征時には配慮有。
支援	・勤務先	・勤務先	・勤務先・公的機関
将来ビジョン	生涯現役としてトライアスロンを続けていきたい。	現役の間は将来のことは考えにくい。	強化選手や代表選手を常に目指していきたい。普及と強化に関わっていきたい。
その他特記事項	13歳で障害発生以降、体育を含め一切スポーツをしなかったが自分を変えたくて3～10歳まで経験した水泳を開始。パラリンピック出場を契機に会社の理解が得られた。	子どもの頃は障害受容ができていなかった。周囲の人の歩み寄りが欲しかった。現在は競技に専念できる雇用形態である。	地元アーチェリークラブの代表。競技人口の少なさが役員継続の要因の一つ。デュアルキャリアを実践している。

項目	20-D	20-E	20-F
調査年度	2020	2020	2020
通し番号	13	14	15
生まれた年	1983	1967	1970
性別	男	男	男
居住地域	関東	東海	東海
調査時身分	自営	選手雇用	自営
障害発生年齢	0	29	16
障害内容	肢体不自由	肢体不自由	肢体不自由
障害程度	中度	重度	中度
学校種別	普通学校	普通学校	普通学校
現在実施競技	卓球	車いすテニス	水泳
競技開始年齢	9	33	36
競技レベル	国際大会入賞	国際大会入賞	国内大会上位
パラスポーツ開始時の重要な他者	・卓球に誘ってくれた小学校の友人 ・母親（卓球国体選手）	・福祉関係職員 ・車いすテニスクラブリーダー ・入院仲間	・障害者水泳指導者
パラスポーツ開始場所	・小学校（卓球クラブ）	・地元市内テニスコート（クラブの練習場所）	・民間スポーツ施設
パラスポーツ情報提供者	・地元体育館ポスター	・市役所 ・社協	・パラ水泳指導者
パラスポーツ開始場所へのアクセス	・本人	・本人	・本人
パラスポーツ開始前のスポーツの影響	・ポジティブ	・ポジティブ	・ポジティブ
パラスポーツ継続時の重要な他者	・パラ卓球クラブチーム監督 ・卓球仲間 ・弟 ・ライナー・シュミット選手	・クラブチーム仲間 ・同じクラスのライバル選手 ・指導者	・仲間 ・妻
パラスポーツ継続状況	高校卒業後一時卓球を中断していたが22歳から再開。仕事を一旦やめ大学へ。卒業後家業の傍ら卓球を続けている。	2010年にクアードクラスに転向し、翌年から国際大会出場。パラ出場を目指して、20試合くらい転戦。現在東京パラを目指している。	現在民間スポーツ施設や障害者スポーツ施設で水泳を継続している。競技をすると気持ちの浮き沈みがあるが、意欲が下がった時には健康づくりで始めたのだからと考え、気軽に水につかる。
支援	・勤務先・スポンサー	・勤務先・公的機関	・なし
将来ビジョン	障害があってもスポーツをすることは可能なことを子どもや親に伝えていきたい。	まずは東京パラリンピック。この年で頑張っていることをアピールしたい。引退後は後継を育てたい。	太らないよう継続したい。引退ということは考える必要はない。
その他特記事項	弟は日本パラ卓球協会の広報担当。	選手雇用、公的補助のおかげでコーチについて練習できるようになった。	パラ水泳を始める前、自ら民間スポーツ施設で様々なことをやり、その中で水泳を継続するようになった。その後、パラ水泳を知り、大会に出場するようになった。

項目	20-G	20-H	20-I
調査年度	2020	2020	2020
通し番号	16	17	18
生まれた年	1993	1990	1997
性別	男	男	女
居住地域	東海	東海	北海道
調査時身分	その他	選手雇用	学生
障害発生年齢	0	18	14
障害内容	肢体不自由	肢体不自由	肢体不自由
障害程度	重度	中度	中度
学校種別	普通学校→特別支援	普通学校	普通学校
現在実施競技	陸上競技	車いすバスケットボール	車いすバスケットボール
競技開始年齢	14	20	18
競技レベル	全国大会出場	国際大会出場	国際大会入賞
パラスポーツ開始時の重要な他者	体育教師（特支）	・ネット情報 ・チームのメンバー	・特になし
パラスポーツ開始場所	・特別支援学校（中学）	・特別支援学校体育館 （クラブチーム練習）	・クラブチームの練習場
パラスポーツ情報提供者	・中学校教師	・インターネット	・小学校時代から地元チームがあることを知っていた（大会が行われていた）。
パラスポーツ開始場所へのアクセス	・本人（特支）	・本人	・本人
パラスポーツ開始前のスポーツの影響	・なし	・ポジティブ	・ポジティブ
パラスポーツ継続時の重要な他者	・特別支援学校教師（陸上部コーチ） ・両親	・最初に声をかけてくれた地元チームのメンバー（尊敬している） ・競技自体の魅力 ・海外の選手からの刺激など	・チームの主将
パラスポーツ継続状況	高校までは特別支援学校で練習。その後障がい者アスリートクラブ（陸上クラブ）で月2回、家での自主トレ（ローラー）	バスケットボールが面白くなり、地元チームの練習に加えて自分で体育館を借りて練習したりするようになった。現在、週に5日か6日練習している。地元チーム以外に県外のチーム練習にも参加している。	これまで好きだから続けていた車いすバスケットボールで、日本代表として活躍することが新たな目標として加わった。国際大会に出場して、多くの人の目に触れることで、これまで支えてもらった人たちに、自分はこれだけのことができるようになったのだと伝えることができる。感謝を伝えられる。
支援	・なし	・勤務先・公的機関	・スポンサー・公的機関
将来ビジョン	もっと速く走れるようになってパラリンピックを目指したい。	41、2歳の時にパラリンピックがあるのでそこまではトップ選手としていきたい。若い選手に日本代表はこういうものだということを伝えたい。	将来は教員になりたいと考えている。現在、大学でも教職課程を履修している。そのため、日本代表の活動は、ある程度の期限を持って進めていきたいと考えている。クラブチームの活動は、一生涯のスポーツとして続けられる限り続けていきたい。
その他特記事項	阻害要因は、ケガや体調不良の影響。下がった気持ちを立て直す際に大きな影響となるのは、コーチの存在。	パラリンピック開催決定後の社会的変化が影響しているといえる：仕事の形態：学校事務（嘱託・アルバイト）→保険会社へ。金銭の心配なく練習時間も確保できるようになった。県からの強化費も受けられるようになった。	車いすバスケットボールをやると、ただの障害者ではなくて、アスリートでいられる。ネガティブだった自分のイメージも変わった。障害に対する考え方、アスリートのマインドを教えてもらった。

項目	20-J	20-K	20-L
調査年度	2020	2020	2020
通し番号	19	20	21
生まれた年	1955	1980	1988
性別	男	男	男
居住地域	九州	関東	関西
調査時身分	その他	自営	選手雇用
障害発生年齢	23	24	0
障害内容	肢体不自由	視覚障害	肢体不自由
障害程度	重度	重度	軽度
学校種別	普通学校	普通学校	普通学校
現在実施競技	車いすテニス	柔道	パラバドミントン
競技開始年齢	26	25	21
競技レベル	国際大会出場	国際大会入賞	国際大会入賞
パラスポーツ開始時の重要な他者	・リハセンPT ・パラ観戦ツアー	・高校の同級生	・パラバドミントン強化コーチ
パラスポーツ開始場所	・リハビリテーション病院	・高校時代の同級生と	・地元パラバドミントンクラブ
パラスポーツ情報提供者	・リハセンPT	・高校時代の同級生（恋人）	・パラバドミントン強化コーチ
パラスポーツ開始場所へのアクセス	・リハセン	・本人	・本人
パラスポーツ開始前のスポーツの影響	・ポジティブ	・ポジティブ	・ポジティブ
パラスポーツ継続時の重要な他者	・妻 ・指導者	・視覚障害者柔道の先輩	・当時の強化コーチ ・同じ境遇の選手
パラスポーツ継続状況	練習時間の確保、大会の遠征費が捻出でき、比較的、日程調整が可能な非常勤の仕事を3つ掛け持ちしながら、競技に集中できる環境を整えた。	2006年に出場した初の国際大会で惨敗し、より一層練習に取り組むようになる。練習内容の変更、練習相手や環境を自らが積極的に動いて探した。同年に開催されたフェスピック大会で優勝して、2008年の北京パラリンピックに出場。	大学部活引退後にパラバドミントン日本選手権出場。準決勝敗退だったが強化選手に。大学院時代、最初の職場では練習は週に2～3回。東京パラを見据えて選手雇用に転職。現在複数拠点で練習。
支援	・なし	・勤務先	・勤務先
将来ビジョン	車いすテニスの日本代表強化に力を注ぐ。総合型地域スポーツクラブの立場から地域の障害者のスポーツ環境を整備する。	ライフワークとしては継続していく。選手として継続するかは、2021年の東京パラの状況を見て決めたい。	できる限り選手としてやっていきたい。
その他特記事項	パラリンピックを直接観戦したことで、自分も出場したいと大きな夢をもらった。車いすバスケットボールでの出場が厳しくなり、車いすテニスに転向。日本一となり、パラリンピック出場を果たす。	以前から柔道をやっており、受傷後、視覚障害者柔道を始めた。	もともとバドミントンをやっていた。途中でパラバドミントンを知り、こちらに関わるようになった。

項目	20-M
調査年度	2020
通し番号	22
生まれた年	1979
性別	男
居住地域	九州
調査時身分	その他
障害発生年齢	18
障害内容	肢体不自由
障害程度	重度
学校種別	普通学校
現在実施競技	陸上競技
競技開始年齢	25
競技レベル	国内大会上位
パラスポーツ開始時の重要な他者	<ul style="list-style-type: none"> ・パラ陸上仲間 (せき損センターで知り合った) ・障害者スポーツセンター職員 ・パラ陸上選手
パラスポーツ開始場所	・車いす陸上の選手らの練習場所（道路）
パラスポーツ情報提供者	・パラ陸上仲間 (せき損センターで知り合った)
パラスポーツ開始場所へのアクセス	・本人
パラスポーツ開始前のスポーツの影響	・ポジティブ
パラスポーツ継続時の重要な他者	<ul style="list-style-type: none"> ・車いす陸上日本代表選手 ・弟
パラスポーツ継続状況	以前は週に6回練習していたが、現在は新型コロナウイルス感染拡大の影響で週に3～4回と減っている。アスリート雇用ではないため、練習や大会にかかる費用はすべて自費。
支援	・なし
将来ビジョン	パラリンピック出場を目指す
その他特記事項	入院中は障害者スポーツのことは考えたことがなかったが、せき損センターで出会った車いす陸上日本代表選手から車いす陸上を見に来ないかと誘われたことがきっかけとなり車いす陸上を始めた。

(藤田紀昭)

仮名 20-A さん

インタビュー実施日時 場所 2020年9月25日 16:00-18:00 オンライン実施

個人基本情報	居住 関東地区 生年月日 1981年 性別 女 障害発生年齢 13歳 障害内容 疾病による右大腿部1/2以上欠損 リハビリ期間 切断後1年間 間欠的に入院治療
略歴	中高一貫校に在学中の13歳夏に骨肉腫を発症し右大腿部より切断、 その後は義足を装着して通学、4年制大学を経て2004年から現在の会社 に正社員として採用
競技基本情報	競技：水泳、トライアスロン (2008C 県障害者スポーツ大会(水泳)で競技開始、2008-2012 ジャパン パラ出場、2010 アジアパラ出場) トライアスロン(2013年～) クラス分け S9(水泳)、PTS2(トライアスロン) 競技成績：2010 アジアパラメダリスト、ジャパンパラメダリスト(水泳) 2016 リオパラリンピック入賞(トライアスロン) 競技開始年齢：水泳(26歳) トライアスロン(32歳)
障害発生から 障害者スポー ツ開始まで	経緯①：中学1年生の夏に骨肉腫発症、右大腿部より切断、義足を装着 するようになる。2004年に新卒(22歳)で現在の会社に正社員として 採用され勤務を続けていた2007年(26歳)に、自分が何か変わりたい と思って水泳を始める。13歳で切断してから学校の体育を含め一切スポ ーツをしてこなかったことから、自分に自信が持てるものが欲しいと思 い、フィットネスクラブに入会し、3歳から10歳まで経験があった水泳 を自分なりにやってみた。その後、インターネット検索で偶然「C ミラ クルズ」という障害者の水泳チームを見つけ連絡して参加することにな った。ここで障害者の水泳と出会うことになる。 経緯②：2009年から現在まで所属している「I インターナショナルスイ ミングスクール」では、朝練習を行ってから出勤していたが、その練習 はトライアスロンコースだった。そこで水泳だけやっていたが、周囲は トライアスリートばかり、トライアスロンは身近であった。当時、自分 は右脚がないからトライアスロンはできないと思っていたが、海外では 同じ障害でトライアスロンをやっている人が何人もいることを知り、日 本にも1名先駆者がいることがわかり連絡をとったところ「日本で1人

	<p>目になればいい」と背中を押された。</p> <p>始めた場所：①フィットネスクラブ、C ミラクルズ</p> <p>始めた場所：②I インターナショナルスイミングスクール</p> <p>重要な他者：①X コーチ、関東パラ水泳合宿の一般公募に応募して出会った。それまで部活動を含めて一切の運動経験がなかった私に、競技を行うということ、トレーニングに向かう姿勢を教えてもらった。</p> <p>重要な他者：②Kさん、同じ障害でトライアスロンの先駆者、義足ではなく片脚で競技をしていたことから、海外での義足選手の事例を紹介し、競技への誘いをしてくれた。アメリカのサラ・レイナートセン選手、筋肉隆々で、堂々としていてカッコいい、その姿に憧れて自分もこんな風になりたいと思った。</p>
<p>障害者スポーツ開始に影響を与えた社会的状況・環境・条件</p>	<p>① C ミラクルズ→障害者水泳との出会い。このチームに出会えたことが大きい。また関東パラ水泳合宿で出会った X コーチとのマンツーマンでの練習環境が構築できたことが非常に大きい。</p> <p>② I インターナショナルスイミングスクールのトライアスロンコースで朝練習を行ってきたことが、トライアスロン競技が身近な環境と感じるきっかけになっており、先駆的な選手の存在、海外の競技情報やトライアスリートたちのオープンマインドな雰囲気競技転向に影響を与えた。</p>
<p>受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響</p>	<p>13歳で切断してから学校の体育を含め一切スポーツをしてこなかったことから、何かスポーツを始めたいと思った時に3歳から習っていた「水泳」が得意であることがスポーツ再開への誘いとなった。</p>
<p>障害者スポーツ継続に関する状況</p>	<p>継続状況：①2012年のロンドンパラを目指すところまでは、通常勤務前後の時間帯に練習をしていた。水泳でのパラ出場は果たせなかった。</p> <p>継続状況：②2013年にトライアスロンに転向、通常勤務のままなので、有給休暇を使いながら海外遠征や合宿に参加し、有給休暇を消費後は「欠勤=減給」で競技していたが、その状況を会社が認めてくれていたので周囲に負担をかけているという思いを抱えながら行っていた。転機は2016年リオパラリンピック出場。会社主催で壮行会が開催され、本社長と話す機会を得たこと。2019年からは全面的に競技活動=業務という形が</p>

	<p>とれるようになった。金銭的にも支援があり自己負担は一切ない。年間8戦程度国内外の大会にも出場してきた。同時に、勤務形態の自由度が増したことにより、従来は勤務時間の関係で断らざるを得なかった子どもたちへの教育講演等を、パラリンピアンとして平日でも実施できるようになり、選手としての活動の幅が広がった。このように競技を継続するにあたっては、会社の理解を得られたことの影響が大きい。</p> <p>主な実施場所：I インターナショナルスイミングクラブ</p> <p>重要な他者：①X コーチ</p> <p>②会社のCSR、本社の社長、トライアスロンコースメンバー、サラ選手</p>
<p>スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件</p>	<p>① 居住地近くに勤務先とトレーニングできるプールがあること。</p> <p>② トライアスロン転向にあたって、身近なトライアスリートたちのオープンマインドに触れ、「壁」を作っていたのは自分だと気付いた。また、パラトライアスロン競技者としてのロールモデルとなったサラ選手の存在が、自身の「障害受容」にも影響を与え、それまで常に使用してきた義足の外装を外すことができ、短パンでも外を歩くことができるようになった。</p> <p>2016年のリオパラリンピック壮行会が会社主催で開催されたことが契機で、周囲の社員から理解・応援されるようになる。また、本社社長と話す機会を得て、直接要望を伝えたところ、全面的に競技活動＝業務という形がとれるようになった。</p>
<p>今後のスポーツ実施</p>	<p>・生涯現役としてトライアスロンを続けていきたい。</p>
<p>まとめ</p>	<p>・自分を変えたくてスポーツを始めた。偶然が重なり障害者水泳やコーチとの出会いがあり、パラリンピックを目指すことへつながった。</p> <p>・水泳からトライアスロンへの転向において、重要な他者との出会いが障害の捉え方に変化をもたらした。現在は自らがロールモデルとして後進を導きたいと思えるようになっている。</p> <p>・競技と仕事の両立において、会社の理解と協力を得られたことが継続に大きく影響している。</p>

(齊藤まゆみ)

仮名 20-B さん

インタビュー実施日時 場所 2020年9月24日 10:00-11:30 オンライン実施

個人基本情報	<p>居住 関東地区 生年月日 1975年 性別 女</p> <p>障害内容：先天性脛骨形成不全で3歳の時に両膝下を切断し、日常生活では義足を使用し競技時のみチェアスキーを使用している。</p>
略歴	<p>専門学校卒業後、臨床検査技師として就職し、その後2008年にアスリート雇いでA社に入社し、2015年から現所属のT社にアスリート雇いで転職している。</p>
競技基本情報	<p>競技：アルペンスキー（座位）</p> <p>競技成績：2006年トリノパラリンピック（回転入賞）/2009年ワールドカップカナダ大会（大回転メダリスト）/2010年バンクーバーパラリンピック出場/2013年世界選手権スペイン大会（回転入賞・大回転入賞）/2014年ソチパラリンピック（回転入賞・大回転入賞）/2017年ワールドカップ白馬大会（大回転入賞）/2020年ワールドカップスロベニア大会（大回転メダリスト）</p>
障害発生から障害者スポーツ開始まで	<p>子どもの頃から義足を使っていたので、友達と遊ぶことはできても体育の授業にはコンプレックスがあり、小学校、中学校、高校の体育はほとんど参加していなかった。子どもの頃は、自分が義足を使っているということを周囲に伝えておらず、「脚が悪い」ということだけを伝えており、皆の前で義足を見せることや外すことは絶対にせず、それを悟られないためにも体育に参加しないと自分の中で決めていた。父や兄がスポーツに親しんでおり、自分も何かスポーツに携わりたいと思っている一方で、なかなかチャンスがなかったが、高校時代に陸上部のマネージャーとなり、スポーツに携わることができてとても嬉しかったという。</p> <p>専門学校入学後、スキー教室に参加することができず、友人たちと一緒に行けなかったことがとても残念で、「自分も一緒にスキーをしたい」と思うようになった。その頃に知り合いの義肢装具士に相談をしたところ、チェアスキーを紹介され2001年から取り組むようになり、友人たちとスキーに行くようになった。</p> <p>その後、技術が上がっていくにつれてよりチェアスキーが面白くなり、徐々に競技に移行していくようになった。また、友人の紹介で2009年</p>

	<p>からアメリカのチームで練習を行うようになり、現地のアメリカ人コーチに師事をしている。</p>
<p>障害者スポーツ開始に影響を与えた社会的状況・環境・条件</p>	<p>専門学校時代に友人たちとスキーをしたいという思いから、義肢装具士の紹介でチェアスキーを始めたが、それ以前からスポーツを楽しみたいという気持ちはあったものの、取り組むことはできなかった。</p> <p>自分自身や周囲の「障害受容」に関して、周囲の人々が障害を受け入れてくれ、一緒にやろうと歩み寄ってくれていたら違っていた（子どもの頃から体育やスポーツに親しむことができた）ように思う。自分自身に障害があるということを言えず、周囲もそれに対してあまり触れないようにしていたように感じていた。</p>
<p>受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響</p>	<p>-</p>
<p>障害者スポーツ継続に関する状況</p>	<p>2001年からスキーを始めて、2006年のトリノパラリンピック出場時は仕事と両立しながら競技を行っていたが、その後トップ選手とのタイムが縮まってくる中で、海外で競技に取り組みたい、コーチに専門的な指導を受けたいと考えるようになり、2008年からA社にアスリート雇用で入社し、週3回ほど入社しながら競技を継続していたが、その後競技に専念できる契約となり、2015年から現所属のT社に転職し競技を継続している。</p>
<p>スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件</p>	<p>2009年からアメリカを活動拠点としているが、師事しているアメリカ人コーチの存在がとても大きい。知り合いの紹介でチームに参加するようになり、スキーは個人競技だけれどもチームの大切さを感じさせてくれる存在である。上手くいった時は褒めてくれ、時には心から叱ってくれることもあり、自分自身が苦しんでいる時にいつも寄り添ってくれている。</p> <p>また、2006年のトリノパラリンピックに出場した時に会った男子立位クラスのメダリストが、何度ケガをしても競技復帰し、自分よりも年上であるが現役で競技を続けていることに強く刺激を受けている。</p>

<p>今後のスポーツ実施</p>	<p>現在のところは 2022 年の北京パラリンピックを目標として練習に取り組んでいる。自分としてはやれるところまで競技を続けて、その後に所属先も含めて関係者に相談したいと思っている。年齢が上がってくるにつれて、「セカンドキャリア」という言葉を聞く機会が増えてきているが、競技をしているとやめた後のことはまだ考えられず、決めかねている状態である。</p> <p>現在の所属先で正社員として働くとしても、自分がどのような仕事をしていけるのか見えにくい部分があり、また、アスリート雇用以前と同様に病院で働くことも選択肢として考えている。</p>
<p>まとめ</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・小学校、中学校、高校時代はスポーツに携わりたいと思いつつも、障害を周囲に悟られたくないという気持ちから十分に組み込まなかった。 ・専門学校時代に友人たちとスキーを楽しみたいと思い、義肢装具士の紹介でチェアスキーを始めた。 ・2008 年からアスリート雇用で競技に専念できるようになり、翌 2009 年からは練習拠点をアメリカに移し、2022 年の北京パラリンピックを目指して競技に取り組んでいる。

(河西正博)

仮名 20-C さん

インタビュー実施日時 場所 2020年7月30日 18:00-19:30 オンライン実施

個人基本情報	<p>居住 九州地区</p> <p>生年月日 1973年（インタビュー時47歳）</p> <p>性別 男性</p> <p>障害発生年齢 生後3か月、脊髄膜炎</p> <p>障害内容 脊髄損傷 1種1級 胸髄5番（体幹がほとんどない）</p> <p>リハビリ期間</p> <p>幼稚園からリハビリ（幼稚園、療育センターに付設されている）。小学校は地元の公立小学校（祖父の力もあり普通学校に入学）。車いすで登校。校内の昇降移動は母親が担当。</p>
略歴	<p>幼稚園時代からリハビリ、普通学校に行き、体育はできるやり方で参加。障害児だから見学ということではなかった。水泳も浮き輪を使ったりハンディをもらったりして参加した。運動会にも参加した。</p> <p>中学も地元公立。中学校でも体育等は同様であった。サッカーや野球もできる方法で参加した。</p> <p>高校も地元高校。体育等は同様に参加したが、進学クラスで活発にスポーツをやるといふほどではなかった。</p> <p>高校卒業後、歯科技工学校へ進学。仕事をしながら3年間通って歯科技工士の資格を取得した。卒業後歯科技工士として働く。</p> <p>就学期間大変なことではなかったがやはり障害があり、仲間に入れないなどのことはあった。</p> <p>歯科技工士から現在はY電機に勤務。地元パラアーチェリークラブ代表。</p> <p>2003年、30歳の時に結婚。</p>
競技基本情報	<p>競技：アーチェリー、コンパウンドのW2</p> <p>競技成績：インタビュー時、日本ランキング5位（コンパウンドの部）</p> <p>2020年2月にドバイの大会で団体メダリスト。強化選手に指定されている。</p> <p>競技開始年齢：21歳</p>

<p>障害発生から 障害者スポーツ開始まで</p>	<p>経緯</p> <p>専門学校卒業後、21歳の時、K市の障害者スポーツセンターでアーチェリーをやっているというのをテレビでたまたま見て、見学に行った。テレビに療育センターの職員が出ており、その後、療育センターでの身体測定の時にその人に声をかけたら、毎週水曜日にやっていると教えてくれた。すぐに見学に行った。アーチェリーはそれ以前からやってみていた。</p> <p>アーチェリーに関心を持ったのはロス五輪の時に車いす選手がオリンピックに出場しているのを見たから。車いすバスケットボールや、車いすテニスと違って、健常者と同じルールでスポーツができるということで関心を持った。小学校から普通学校に行っていたということもあった。また、体の状態のこともあり、テニスやバスケットボールは難しいかもしれないがアーチェリーならできるんじゃないかと思った。それからすぐに始めた。</p> <p>それから1年もしないうちに大会に出た（最初はリカーブで）。</p> <p>最初にスポーツを始めた場所</p> <ul style="list-style-type: none"> ・K市障害者スポーツセンター <p>重要な他者</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ロス五輪に出ていた車いすアーチェリー選手（ネロリ・フェアホール） ・テレビに映っていた療育センターの職員
<p>障害者スポーツ開始に影響を与えた社会的状況・環境・条件</p>	<p>オリンピックに出場していた車いすのアーチェリー選手を見てアーチェリーに関心を持つようになった。本人の障害（体）の状態、また、普通学校に通学していたことも影響している。</p> <p>その後、地元K市でアーチェリーをやっていることをテレビで見、療育センター職員から情報を得て始めるに至った。地元パラアーチェリークラブがあったことも大きい。</p>
<p>受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響</p>	<p>ほぼ先天的な障害と言えるため記載事項なし。</p>

<p>障害者スポーツ継続に関する状況</p>	<p>K市出身でもあることから、2013～2014年頃からクラブの代表となった。事務的な仕事も含め、様々なことでアーチェリーに関わらざるを得ない立場であるし、責任もある。そうしたポジションにあることがアーチェリー継続に影響している。</p> <p>リカーブを射っていた最初の1年は点数が出なかった。歯科技工士ということで強い力で引くことは指先に影響があり、仕事に悪影響も出るのではないかというアドバイスもありコンパウンドに変更した。規則的にも体力的にもこちらの方が自分に合っていた。</p> <p>誰かを師と仰いでいるわけではなく我流でやっているが、点数が出るようになると面白くなり続けている。</p> <p>家族（妻）の支えは大きい。遠征時のサポート（荷物の運搬等）をしてもらえるのはありがたい。</p> <p>会社は普通の契約社員で、遠征費とかは出ないがドライブの大会は出張扱いにしてくれた。</p> <p>強化選手になったので少しは協会から補助金等を上乘せしてもらえるかもしれない。</p> <p>重要な他者</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地元パラアーチェリークラブの存在。 ・妻
<p>スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件</p>	<p>地元パラアーチェリークラブがあったことが大きい。またそのクラブの幹部になったことで競技以外にやるべき仕事もあり、継続につながっている。</p> <p>競技を継続する中で成績が上がるのが継続のモチベーションとなっている。</p> <p>仕事と競技を両立させており、デュアルキャリアを実践している。仕事をしつつ、競技も続けるというバランスの良さが継続の要因とも言える（仕事があり、生活基盤が安定しているから競技も継続できる）。</p> <p>配偶者が様々な形でサポートをしてくれていることも継続するにあたっての要因である。</p>

<p>今後のスポーツ実施</p>	<p>強化選手や代表を目指して毎年、挑戦はしていきたい。目標があるということはモチベーションになる。</p> <p>試合に行けばいろいろな人とのコミュニケーションもあるし楽しいし継続していきたい。</p> <p>アーチェリーをやめるという気はない。選手層が薄いのでクラブの現在のポジションもなかなかやめられない。</p> <p>普及と強化には関わっていきたい。実際にはなかなか機会がないが、機会があれば、自分の持っている知識や技術を必要としている選手に伝えていきたい。そんな中から日本代表なんかが出れば誇らしい。</p>
<p>まとめ</p>	<p>小中高、専門学校と普通学校に通学していたことが、健常者と同じようにできるアーチェリーへの志向性に影響している。アーチェリー開始にあたってはメディア（テレビ）からの情報、知り合い（療育センター職員）の存在が影響していた。</p> <p>地元K市に障害者スポーツセンターがあること、そこにパラアーチェリーのクラブがあったこと、車の運転ができることがアーチェリー開始の要件として考えられる。</p> <p>継続にあたっては、地元パラアーチェリークラブの代表者としてのポジション、技術や成績の向上、デュアルキャリアの実践、配偶者のサポートが影響していると考えられる。競技人口の少なさがクラブ役員継続の要因の一つになっていた。これらは地域における他競技にも同様に言えることである。</p> <p>将来的にも目標を持って競技を続けるとともに、普及や強化にも機会があれば関わることを考えている。</p>

(藤田紀昭)

仮名 20-D さん

インタビュー実施日時 場所 2020年7月27日 14:00-15:30 オンライン実施

個人基本情報	<p>居住 関東地区（2019年4月までは九州地区）</p> <p>生年月日 1983年（インタビュー時36歳）</p> <p>性別 男性</p> <p>障害発生年齢 先天性</p> <p>障害内容 二分脊椎 障害手帳は3級 歩いたりゆっくり走ったりできる。</p>
略歴	<p>小中高と普通学校に通学。高校卒業後22歳まではアルバイト、その後一般企業に就職。27歳で退職しF大学商学部に入學。小中高大と卓球クラブ、卓球部に所属した。大学卒業後は家業を手伝う。現在は4社がスポンサーについている。</p>
競技基本情報	<p>競技：卓球、国内ランキング1位 国際ランキング30位台</p> <p>クラス分け CLASS8（立位）</p> <p>競技成績：アジア競技大会メダリスト、ワールドツアー大会メダリスト</p> <p>競技開始年齢：小学4年（9歳）</p>
障害発生から障害者スポーツ開始まで	<p>経緯（高校まで）</p> <p>走れない分、上半身のトレーニングは他の人以上に行った。そのことは卓球を始めてからも影響があったかもしれない。</p> <p>先天的障害だが小中高と普通学校に通学。</p> <p>体育も多少ハンディがあったが、すべて参加していた。親の事前の希望が学校に伝えられていたと思う。</p> <p>小学4年の総合学習の時間でクラブ活動というのがあって、2週間に1度ほど卓球クラブに参加。卓球に入ったのは仲のいい友人に声をかけられてたまたま。卓球がどんなものかも知らなかった。</p> <p>実は母親は卓球の国体選手だったがこの時まで知らなかった。その後母親から回転をかけたサーブ（魔球のような）を教わり、この時は障害のない子どもにも勝ったりした。</p> <p>中学に入ってから、部活に入ると高校入試の時も有利だろうと卓球部に所属した。中学1年生の地区大会では優勝した。これでちょっと卓球にのめりこんだ。➡校内での表彰の時、なんでお前なんかがという友人</p>

	<p>の視線もあり、さらに頑張った。</p> <p>中学3年くらいからは周りの生徒も技術をマスターし、体力的にも差が出てきたのでだんだん勝てなくなった。ただ工夫すれば対等に戦えるところが面白かった。</p> <p>高校では県大会に進むことと、レギュラーになることを目標に頑張った。練習は4時過ぎから10時くらいまでやっていた。</p> <p>パラ卓球との出会いは中学2年時。地元の市立体育館にポスターが貼ってあったのを見て大会に出た。その後中学2年から高校の時は年に2～3回大会に出ていた。この頃からパラリンピックを目標に頑張っていた。周りからも頑張ればパラリンピックに出られると言われて（実際にどうやって出るかまでは知らなかった）。</p> <p>パラリンピックに出るためには国際大会に出なくてはならず、お金も300万から400万円必要だと言われ、経済的に厳しいことから努力しても出られないと感じ、一度断念した。</p> <p>最初にスポーツを始めた場所</p> <ul style="list-style-type: none"> ・小学校（卓球） <p>重要な他者</p> <ul style="list-style-type: none"> ・卓球に誘ってくれた友人 ・母親（卓球国体選手）
<p>障害者スポーツ開始に影響を与えた社会的状況・環境・条件</p>	<p>先天的な障害であるが、歩行が可能なこともあり、小中高と普通学校に通った。そのため小学校の卓球クラブ、中学・高校の部活の卓球部も障害のない児童生徒とともに練習、大会に参加していた。</p> <p>母親が卓球の国体選手であったことから技術的な指導を受け、中学2年生くらいまでは地区でもトップクラスの選手であった。</p> <p>一方、中学2年生からパラ卓球の大会にも参加していた。パラ卓球の存在は地元の市立体育館に貼ってあったポスターで知った。</p> <p>高校時代はパラリンピックを目指そうとしていたが、金銭的な理由から努力が報われないと考え高校卒業後一旦、卓球から離れた。</p> <p>先天的障害であったことから下半身を鍛えることが難しい代わりに上半身をトレーニングしており、卓球にも影響していると考えている。</p> <p>中学時代、校内の表彰時に他の生徒から「なんでお前が」というような視線を感じたが、それが逆に卓球へ向かう気持ちを高めた。</p>

<p>受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響</p>	<p>先天的障害のため記載なし。</p>
<p>障害者スポーツ継続に関する状況</p>	<p>(高校卒業後から)</p> <p>高校を卒業してしばらく卓球はお休みしていたが、22歳の時、福岡の障害者卓球チームの会長の強い勧めと、友人のチームから練習に誘われて再開した。22～23歳の時に香港の大会に出て障害の重いドイツの選手が努力している姿に感動して、自分もあのようになりたいと思った。この選手を見て金銭的なことは何一つ解決できていないにもかかわらず、国際大会を見据えて頑張ろうと思った。</p> <p>F大学は卓球の強い大学(それもあってF大学を選んだ)。そこで一般学生として障害のない学生と一緒に練習をしていた。九州学生大会には出場していた。</p> <p>大学に入った2011年頃から再度パラリンピックを目指そうと思った。学費のこともあり、学生で国際大会に出てロンドンを目指すのは難しいと思いリオを目指すことにした。</p> <p>卒業後、実家の会社に入り卓球を続けた。仕事をしながら卓球を続けるのにはアスリート雇用などなかったこの時期には一番都合が良かった。</p> <p>国際大会を目指すようになってからも金銭的な制約があり、国際大会は年に2～3大会が限度であった。これではなかなかランキングポイントが取れずパラリンピック出場は難しい。</p> <p>2015年にはリオ大会出場がかかっていたので12の国際大会に出場。前年の2014年頃から少しずつスポンサーがついてくれるようになった(個人、あるいは協会に)。自分たちで企業をめぐって獲得していった。が、リオには6ポイント届かず(自分より上位に6名いて、ポイントでその6名を追い抜けなかった)出場できなかった。</p> <p>卓球を続け、試合に臨んだり、海外遠征したりするのには弟の存在が大きかった。</p> <p>重要な他者</p>

	<ul style="list-style-type: none"> ・パラの選手ではなく、別の学校に通っていた人 ・福岡のパラ卓球のクラブチームの監督（年1回でも大会に出るためチームにつながりとしてくれていた） ・ドイツのライナー・シュミット選手 ・卓球選手で活躍していた弟、現在、日本パラ卓球協会の広報。
<p>スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件</p>	<p>卓球仲間から誘いを受け、一旦離れていた卓球を再開することとなった。</p> <p>初めて参加した香港での国際大会でドイツの選手を見て大きな影響を受け、卓球への思いが強くなった。</p> <p>国際大会、とりわけパラリンピックを目指すためには海外大会でポイントを積み重ねることが必要で経済的には厳しいものがある。</p> <p>しかし、リオ大会前からスポンサーがつき始め、2015年には12回の海外遠征が可能となった。</p>
<p>今後のスポーツ実施</p>	<p>現役を引退したのちは卓球を通して病気などで入院していて運動する機会や情報がない子どもに体を動かす機会を作るような活動をしたい（障害があってもスポーツをすることは可能だということを子どもたちと「親」に示し、人生の選択肢を増やしてあげたい）。</p> <p>パラ卓球の国際試合に合わせた観戦ツアーや現地で卓球交流を行うなどの事業もやってみたい。</p>
<p>まとめ</p>	<p>先天的に障害があったこと、また歩行が可能であったことから普通学校に通い、そこで卓球と出会った。その後も障害のない選手と一緒に練習する中で力をつけてきた。</p> <p>高校時代までパラリンピックを目指そうとしていたが、経済的側面が課題であった。</p> <p>一旦卓球を離れるが、卓球仲間やクラブ会長、ドイツの選手などの影響を受け、再度パラリンピックを目指すことになる。</p> <p>大学卒業後は実家の会社に入り、働く傍ら卓球を続けている。2014年からスポンサーがつき始め、経済的支援等を受けられるようになった。</p> <p>コロナ感染状況下でポイントとなる大会に出られず、パラリンピックに出られるのか、またスポンサーに対しても現状を理解してもらうために苦慮している。</p>

(藤田紀昭)

仮名 20-E さん

インタビュー実施日時 場所 2020年2月25日 Gメモリアルセンター会議室

個人基本情報	居住 東海地区 生年月日 1967年（インタビュー時52歳） 性別 男性 障害発生年齢 1997年1月 29歳 障害内容 ギランバレー症候群 リハビリ期間 発症後3年半入院、その後7年くらいかけて体の状態は少しずつよくなる。
略歴	高卒後社会人に。 現在、アスリート雇用（東京の会社）。つなひろワールドを利用して雇用してもらった。給料のみ支払ってもらっている。契約は2018年2月から2021年2月まで（3年契約）。会社には一度も行ったことがない。その後のことは何も決まっていない。
競技基本情報	小・中学校は野球、高校卒業後就職し、草野球やスキー（20歳から9年間）をしていた。 競技：車いすテニス クラス分け クアードクラス 競技成績：世界ランキング10位台、日本ランキング7～8位 競技開始年齢：33歳
障害発生から障害者スポーツ開始まで	経緯 32歳で退院後、市役所や社協に行き情報をもらい、デイサービスに通うようになった。その施設に体育館があった。そこで、ポッチャや卓球、バスケットボールなどの道具があり、体を動かした。 翌年2001年、33歳の時に社協で車いすテニスに関する情報を得てコートに行った。35、6歳までは月に1度コートに行って少し体を動かす程度だった。 最初にスポーツを始めた場所 K市福祉の里（複合福祉施設）体育館 テニスを始めた場所 市内テニスコート（市内車いすテニスクラブの練習場所）

	<p>重要な他者</p> <ul style="list-style-type: none"> ・福祉の里の職員（社協）（社協からの情報） <p>とにかく体を動かしたかった。最初の情報が卓球だったら卓球をやっていたかもしれない。また、車に車いすをのせる方法なども教えてくれた。</p> <p>① K テニスクラブのリーダー</p> <p>② 生きていく上で、入院仲間の存在が大きかった。</p>
<p>障害者スポーツ開始に影響を与えた社会的状況・環境・条件</p>	<p>スポーツに関する情報の出どころとしては社会福祉協議会であった。当該選手はその情報に自らアクセスしていた。</p> <p>社協に隣接の体育館で体を動かし始めた。最初の頃は病気の影響でラケットもしっかり持てないような状態だった。そこから少しずつ体が回復し、テニスのようなことができるようになった。</p> <p>同じく、社協で車いすテニスの情報を得てクラブに顔を出すようになった。</p> <p>35、6 歳でテニス用車いすを購入し、それから本格的に練習するようになった。大体週 1 回くらいのペースで。</p>
<p>受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響</p>	<p>障害を持つ前は、野球やスキーをやっていた。その影響はプラスに働いている。</p> <p>特に野球は同じ球技で道具を使う。バットがラケットに変わったという感覚が大きい。ボールを芯で飛ばすというところも似ている。</p>
<p>障害者スポーツ継続に関する状況</p>	<p>継続状況</p> <p>最初にテニスの大会に出たのは岩倉市のニューミックス大会。チームの仲間に誘われた（38、9 歳の時）。</p> <p>次に大阪のシングルス大会に出場した。負けたけど楽しかった。100 人からの車いすテニスプレーヤーが集まり活気があった。それから練習し、B クラスくらいまで行った。</p> <p>2010 年にクアードクラスに転向した。転向はクアードクラスの存在を知ったのち、車いすテニス仲間のアドバイスを受け、諸手続きを経て転向した。</p> <p>2010 年のジャパンオープンの時、世界で戦う気があるか、車いすテニス協会の人に聞かれ軽い返事でやってみると答えた。</p>

	<p>2011年の韓国の大会が初めての国際大会だった。それから翌年のパラリンピックを目指し、ランキングを取るために20大会くらい出場した。</p> <p>経済的には非常に苦しかった。ロンドンパラリンピックではダブルスで入賞。その時、次はメダルが欲しいと思った。</p> <p>リオ大会にも出場。経済的にはやはりずっと大変だった。リオではシングルスは1回戦、ダブルスも1回戦で負けた。</p> <p>東京大会開催が決まっていたのでそれまでは続けようと思った。</p> <p>現在は県の強化選手になっており、強化費として相当額をもらっている。</p> <p>おかげでコーチをつけての練習などができるようになった。東京ではぜひメダルを取りたい。</p> <p>主な実施場所 県内テニスコート</p> <p>重要な他者</p> <ul style="list-style-type: none"> ・県内のテニス仲間の存在が大きい。 ・また、同じクラスのライバルでもあるK選手の存在も大きい。国際大会のダブルスなど一緒に組んで出場している。 ・3年前からついて練習しているコーチの影響も大きい。
<p>スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件</p>	<p>大会に出場することで少しずつ上を目指す気持ちが生まれ、このことが継続へのモチベーションとなっていると考えられる。</p> <p>クアードクラスへの転向によりランキングが上がり、世界の舞台で活動するきっかけとなった。</p> <p>重要な者として県内テニス仲間、ライバルでもありチームメイトでもあるK氏、コーチが挙げられている。日常的な練習仲間、日本代表レベルでのライバル、強化を支えるコーチである。</p> <p>東京パラリンピック開催の影響は、企業契約や県からの強化費の受け取りなど経済的側面においてプラスに働いていた。</p>
<p>今後のスポーツ実施</p>	<p>まずは東京パラリンピック。この年齢で頑張っているというところをアピールしたい。</p> <p>いずれは引退することになる。引退したら後継を育てたい。それは今も同じ気持ち。今でも若い選手と一緒に練習する中で彼らを指導して育てたいと思う。できれば地元で。</p>

まとめ	<p>受傷後、スポーツを始めるに際しては、とにかく体を動かしたいという気持ちがあり、自ら市役所や社協を訪れ情報を得ていた。またその社協に隣接して体育館があり、そこでスポーツを始めることができた。</p> <p>また病気の最中は同じ入院仲間との出会いが生きる上で大きな支えとなっていた。</p> <p>のちに、社協から車いすテニスの情報を得て、ここでも自ら車いすテニスチームにアクセスしていた。</p> <p>本人にスポーツをやりたいという欲求があったこと、社協にそうした情報があったこと、スポーツへの導入場所となる体育館が社協に隣接していたこと、車いすテニスに関しては居住地近くに車いすテニスチームがあったことがスポーツを始められた要因である。</p> <p>車いすテニスを本格的に始めてからは上を目指そうとする向上心や日頃から一緒に練習している仲間、ライバルであり、代表チームの仲間である K 氏、2018 年以降指導してもらっているコーチが重要な他者と言える。</p> <p>東京パラリンピック開催決定後、企業契約や強化費により経済的にサポートしてもらえるようになっていた。このことが競技力向上に大きな影響を与えていると考えられる。</p> <p>現役引退後は地元を中心に後継選手の指導をしたいと考えていた。</p>
-----	----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

(藤田紀昭)

仮名 20-F さん

インタビュー実施日時 場所 2020年2月24日 13:00-15:00 G県福祉友愛アリーナ

個人基本情報	<p>居住 東海地区</p> <p>生年月日 1970年（インタビュー時49歳）</p> <p>性別 男</p> <p>障害発生年齢 16歳 障害内容 左上肢機能全廃 入院リハビリ期間 1年程度</p>
略歴	<p>高校1年生の時に事故。1年後に定時制高校へ入学しなおし、IT関係の仕事しながら卒業。その後、IT関連の仕事で何度か転職を経て、現在独立して仕事を行っている。IT関連の本も出版している。28歳で結婚。家族は妻。</p>
競技基本情報	<p>競技：水泳 クラス分け S8クラス</p> <p>競技成績：ジャパンパラ競技大会優勝</p> <p>競技開始年齢：36歳頃</p>
障害発生から障害者スポーツ開始まで	<p>経緯①</p> <p>高校1年生の時に、オートバイの自損事故により転倒時に左側面を打ったことで左機能障害が残り、その後神経移植を行い肩あたりまで動くようになった。事故後、3か月入院し、転院し手術して、翌年の春には定時制高校へ転学した。仕事をしながら高校へ通っていたので、運動は全くしなかった。定時制高校1年生の時はプログラムの勉強をして、ある程度できるようになった2年生からコンピュータ関係の会社に就職し、仕事と学業の両立となった。プログラムは、高校のある先生が教えてくれた。卒業後、何度かIT関連で転職を経て、現在は独立して仕事を行っている。30歳くらいから、健康診断でお腹回りや体重の増加が気になりだして、健康づくりのために運動するようになった。近くの民間スポーツ施設でいろいろなことを試して、プールだけ通うようになった。</p> <p>経緯②</p> <p>水泳は全く泳げなかったのが、民間スポーツ施設のプライベートレッスンを受けて泳げるようになった。2006年からマスターズ大会に出場するようになった。大会の飛び込み練習のために別の練習場所に行き、H</p>

	<p>さん（水泳の有力者）、Uさん（障害児水泳を指導している方）に会い、障害者の水泳大会やパラリンピックというものがあることを知る。2006年にマスターズ大会（レインボーカップ）に出場し、小さなマスターズ大会に出た後、2007年に中部障がい者水泳選手権大会に出場し、ジャパンパラ大会の標準記録を突破しジャパンパラ大会に出場した。ジャパンパラ大会では、ベンチテストが実施され、たまたま参加した時期が国際大会と併用していたもので、国際クラス分けを受けることができた。初出場のジャパンパラ大会は泳法違反で失格となってしまった。その後、毎年障害者の水泳大会にも出場するようになった。</p> <p>始めた場所：民間スポーツ施設</p> <p>重要な他者：Uさん（障害児水泳を指導していた方）</p>
<p>障害者スポーツ開始に影響を与えた社会的状況・環境・条件</p>	<p>① 健康診断で自分の結果が気になったことで、健康づくりのために運動を始めた。友達と一緒に禁煙ができるかといったゲーム感覚で始めたことも楽しみながら始められた。</p> <p>② 民間スポーツ施設で水泳仲間ができて、マスターズ大会を知ったこと。民間スポーツ施設以外へ練習に行ったことで、障害者水泳に出会えた。</p>
<p>受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響</p>	<p>中学校から高校1年生まではバスケットボール部（事故を起こすまで）小学校まではスポーツに取り組むというより、山や川など自然を活用して毎日遊んで、走り回っていた。</p>
<p>障害者スポーツ継続に関する状況</p>	<p>継続状況</p> <p>健康づくり、ダイエット目的で始めたこと。</p> <p>仲間がいて楽しいこと。</p> <p>練習環境が合っていた。</p> <p>主な実施場所 民間スポーツ施設、G県福祉友愛プール</p> <p>重要な他者 仲間、友達、妻</p>
<p>スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件</p>	<p>競技を行うと気持ちに浮き沈みがある。意欲が下がった時には、結局健康づくり目的で始めた水泳だからと考えて、気軽にプールにつかろうと思っていくようにすると、仲間もいることで徐々に楽しくなってきた。いつも通り泳ぐようになっていく。その繰り返しで続けられている。</p>

	<p>仲間と環境の影響が大きい。</p> <p>妻は食事に気を付けてケアをしてくれている。トレーニングだけではなく、食事も重要な支援。</p> <p>水泳は、用具費用があまりかからないこともあり、水泳を継続する上での阻害要因はあまりない。</p>
<p>今後のスポーツ実施</p>	<p>太らないようにトレーニングを継続していきたい。引退するという考え方は必要ないと思っている。自分のペースに合わせて続けていきたい。</p> <p>指導者ということは考えていないが、障害者の方に時々アドバイスは自分なりにしている。</p> <p>今後、障害者とか健常者とか関係なく、水泳ができる環境になると良いと考えている。</p>
<p>まとめ</p>	<p>30歳から健康づくり（ダイエット）のために水泳を始めたのがきっかけ。友達と一緒に禁煙ができるかといったゲーム感覚で始め、楽しむことができたこと、水泳仲間ができたことも継続要因の一つ。</p> <p>練習環境が合っていたことが、継続要因に大きく影響している。</p> <p>健常者のマスターズ大会出場のため、別の場所での練習を行ったことで障害者水泳の大会を知ることになった。2007年から障害者水泳の大会にも出場している。</p> <p>2011年から7年連続ジャパンパラ競技大会でメダリスト。2012年には日本記録を更新した。残念ながら、パラリンピック出場は叶わなかった。</p> <p>今も現役であり、これからも優勝目指して頑張っていく。また、老人になっても楽しんで、健康づくりのためにトレーニングを継続していきたいと考えている。</p>

(安藤佳代子)

仮名 20-G さん

インタビュー実施日時 場所 2020年2月24日 10:00-12:00 G県福祉友愛アリーナ

個人基本情報	<p>居住 東海地区</p> <p>生年月日 1993年（インタビュー時25歳）</p> <p>性別 男</p> <p>障害発生年齢 0歳（1歳時に障害認定） 障害内容 脳性麻痺（体幹機能全廃、上肢左右に著しい機能障害）</p>
略歴	<p>先天性障害。小学校までは地域の通常学校へ通い、中学校、高校は特別支援学校。卒業後就職するが、現在は退職して無職。就職経験は2か所。</p> <p>中学1年生で車いすバスケットボールの部活に入り、その後中学2年生から陸上部へ変わり、その後は陸上競技を継続して現在に至る。</p>
競技基本情報	<p>競技：陸上 クラス分け T34</p> <p>競技成績：全国障害者スポーツ大会メダリスト（2012年）、ジャパンパラ陸上競技大会入賞（2016年）</p> <p>競技開始年齢：14歳（中学2年生）</p>
障害発生から障害者スポーツ開始まで	<p>経緯①</p> <p>三つ子で生まれて、1歳の時に障害があることがわかった。歩行器やクラッチを使用して歩いていたが、成長とともに車いすを使用するようになった。小学校では、体育はできるだけ参加をしていたが、成長とともに健常者の同級生が勝ち負けにこだわり出した頃から、人間不信になってしまった。中学校から特別支援学校に通うようになり、その頃から車いすを使うようになった。元々スポーツは好きではなかったが、学校で車いすバスケットボールの社会人チームが練習していたことから、車いすバスケットボールの部活に入るようになった。</p> <p>経緯②</p> <p>車いすバスケットボール部は1年間で辞めて、陸上部に入り、競技をするようになった。現在のコーチ（特別支援学校の先生）と出会ったことが陸上を始めるきっかけになった。初めて出場した県大会で、50m走とソフトボール投げで大会新記録を出した。</p>

	<p>始めた場所 特別支援学校（中学部）</p> <p>重要な他者 特別支援学校の先生2名（3年間担任、体育の先生（陸上コーチ））</p>
障害者スポーツ開始に影響を与えた社会的状況・環境・条件	<p>小学校では理科の実験でも見学するといったように制限されている学校生活であったが、特別支援学校に中学部から通うようになって、これまで止められてきたことをいろいろとできるようになって、スポーツにも挑戦するようになった。</p> <p>中学部での3年間を通して面倒をみてくれた担任の先生と、陸上部で指導してくれた先生に出会ったことで、精神的にも向上できた。</p>
受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響	<p>先天性なので、受傷前のスポーツ経験はない。</p> <p>実際にはスポーツを始めたのは中学生からであるが、もっと小さい頃からスポーツを行える環境にあった場合の意見として下記に示す。</p> <p>（選手の意見：障害者＝スポーツはしてはいけないと思っていた。もっと早く知っていればまた違った選択をしたと思う）</p> <p>（選手の母の意見：今だから言えることとして、もっと小さい頃からスポーツを行う環境においていたら違っていたと思う。障害児がスポーツを行うには、家族の後押しが大事になる。地域で障害者スポーツができる環境や回数をもっと増やしていくと良いと思う）</p>
障害者スポーツ継続に関する状況	<p>継続状況</p> <ul style="list-style-type: none"> ・高校までは特別支援学校で練習 ・G障がい者アスリートクラブ（陸上クラブ）月2回 ・家での自主トレ（ローラー） <p>主な実施場所 特別支援学校、陸上競技場（関市の中池か洞戸）</p> <p>重要な他者 特別支援学校のY先生（陸上コーチ）、両親</p>
スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件	<p>中学部での練習は週2回、高等部になると自主練が入ってきて練習も増えた。</p> <p>I選手の講演会に参加したことをきっかけに、時々会う機会を作ってもらえた。I選手の影響もあり、高校を卒業すると同時に自分用にレーサーを作った。その時以来替えていなかったレーサーを改造した。</p> <p>地元G県で全国障害者スポーツ大会が実施されることが決まったことで、強化練習などが実施されていた。大会後に障害者の陸上クラブ（ア</p>

	<p>スリートクラブ) が立ち上がった。</p> <p>特別支援学校卒業後に就職したが、その就職先で障害や競技への理解が得られず退職せざるを得なかった。小学校での経験により、人間不信によるうつ傾向が、職場の理解が得られないことで再発してしまった。職場の理解が得られることが、競技を継続することの重要な要因である。仕事と競技の両立は難しい。</p> <p>陸上を始めた時に指導してもらった Y 先生が現在もコーチとして指導を担当してくれている。</p> <p>2 年くらい前から、障害の影響で車の運転ができなくなってしまったことで、送り迎えをお願いしている。練習場所が自宅から距離がある。</p> <p>優秀な若手選手が数多く出てきている。県大会では優勝しても、ジャパパラ大会になると勝てない。パラが注目されて嬉しいが、優秀な若手選手が多く出場してきて勝てなくなってしまった。26 歳でもベテランに位置づけられる。最近は、自分に勝つつもりで標準記録を突破することやタイムを維持することを考えて練習している。</p> <p>継続するために一番重要なことは、気持ち。コースに入った時にとても気持ちが良い。それが競技を辞めたくない理由。</p> <p>阻害要因①は、ケガや体調不良の影響。下がった気持ちを立て直す際に大きな影響となるのは、コーチの存在。</p> <p>阻害要因②は、練習環境と用具費・遠征費の費用面。維持費もかかるので、その面で競技を継続できない人も多くいる。</p>
<p>今後のスポーツ実施</p>	<p>20 秒台とか 21 秒を出すことを目標に競技を頑張りたい。</p> <p>パラリンピックを目指したい (Y 先生に恩返しをしたい)。</p> <p>I 選手のような選手になりたい (区分は違うが、競技に対する精神面などを見習えたらと思っている)。</p> <p>パラスポーツをもっと知ってもらえるよう、認知度が上がって欲しい。全スポ出場の際には、注目してくれたが、ジャパパラ等の出場は注目されず、反応も薄い。</p>
<p>まとめ</p>	<p>特別支援学校に中学部から入り、スポーツを行うきっかけを得た。先生に陸上を教えてくれる方がいたことで、陸上を行い、現在に至る。コーチもその時のコーチが今でも指導を行ってくれている。</p> <p>地元県での全国障害者スポーツ大会が実施されることが決まり、スポ</p>

	<p>ーツ環境が変わっていった。大会終了後に、障害者の陸上クラブができた。</p> <p>特別支援学校卒業後は、陸上クラブで練習を行っている。</p> <p>学校卒業後、就職先で競技や障害の理解が得られず、退職することに。現在は無職。将来的には就職をしなくてはいけないと考えているが、現在は競技に集中したい気持ちが強い。</p> <p>現在は、レーサーを改造して、新しいフォームに挑戦中。</p> <p>将来、パラリンピックに出場して、コーチに恩返しをしたい。</p>
--	--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

(安藤佳代子)

仮名 20-H さん

インタビュー実施日時 場所 2020年2月26日 G県障害者スポーツ協会会議室

個人基本情報	<p>居住 東海地区</p> <p>生年月日 1990年（インタビュー時30歳）</p> <p>性別 男性</p> <p>障害発生年齢 2008年6月 18歳</p> <p>障害内容 下肢切断および機能障害（交通事故）</p> <p>リハビリ期間 入院7か月、20歳まで入退院の繰り返しで事故後約2年間。</p>
略歴	<ul style="list-style-type: none"> ・小・中学校では野球（キャッチャー）。 ・高校卒業後フリーターの時に交通事故。 ・20歳の時（2010年）から車いすバスケットボールを始める。 ・地元チームとしては日本選手権には出た経験がない。 ・24歳の時学校職員嘱託になる。 ・2016年日本代表チームに声がかかった。代表入りはリオ後2017年から。 ・2017年から現在まで大手保険会社社員（日本車いすバスケットボール連盟のサポートにより）。 ・2018年世界選手権上位
競技基本情報	<p>競技：車いすバスケットボール クラス分け 持ち点3.5点</p> <p>競技成績：日本代表候補</p> <p>競技開始年齢：20歳</p> <p>現在、日本代表候補、持ち点3.5で体が大きい（190cm）のが特徴の一つ。</p>
障害発生から障害者スポーツ開始まで	<p>経緯</p> <p>20歳でリハビリがおおよそ終わるという目途がつき、仕事もしておらず、時間があり、車いすでみんなと遊ぶというのもイメージがわからず、何か競技でもやろうと考えた。車いすの人は普通に車いすスポーツをするというイメージがあった。</p> <p>リハビリ中は病院スタッフの支えが大きかった。</p>

	<p>車いすバスケットボール、車いすテニス、パラ陸上は漠然と知っていた。</p> <p>県内で車いすバスケットボールをやっているところをネットで探し、見学に行った。楽しそうだし、すごいと思った。それから少しずつ練習に参加。</p> <p>練習場所は 40～50 キロ離れていたが、事故前に車の免許を取っていたので、車に手動装置を付けて、免許も車いす用に条件を書き換え、週 1 回、自分で運転して通った。</p> <p>親の友人に車いすの人がいたり、親が福祉関連の仕事をしていることも情報取得や車いすを身近に感じたりする上で影響あり。</p> <p>最初にスポーツを始めた場所</p> <p>S 市の特別支援学校の体育館（この卒業生が集まって作ったチームだった）。</p> <p>重要な他者</p> <p>ネット情報、チームのメンバー</p>
<p>障害者スポーツ開始に影響を与えた社会的状況・環境・条件</p>	<p>ネットの普及</p> <p>障害者スポーツに関する情報の普及</p> <p>特別支援学校卒業生を中心とした車いすバスケットボールのチームの存在</p> <p>医療関係者の支え</p>
<p>受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響</p>	<p>野球をやっていた。多少ともプラスになったのではないかな。</p> <p>競技という部分で共通するところがある。ボールとの距離感とか。</p>
<p>障害者スポーツ継続に関する状況</p>	<p>バスケットボールが面白くなり、地元チームの練習に加えて自分で体育館を借りて練習したりするようになった。</p> <p>試合には 1 年目の途中から出るようになった。</p> <p>24 歳の時学校職員嘱託となり、収入が入るようになり、練習を増やした。正職の仕事につくと練習に差し障るのでつかなかった。</p> <p>2017 年、連盟のサポートにより、大手保険会社に。G 駅前の支社に週</p>

	<p>4日出社（事務補助）、その後練習という生活。仕事に行くことで1日のリズムを作りやすい。</p> <p>現在、週に5日か6日練習している。地元チーム以外に県外のチーム練習にも参加している。</p> <p>連盟に強化費が出ている関係で遠征費などは連盟持ち。</p> <p>G県からも強化費が出ており、ほとんど自己負担はない。</p> <p>重要な他者</p> <ul style="list-style-type: none"> ・最初に声をかけてくれた地元チームのメンバー（尊敬している） ・競技自体の魅力 ・海外の選手からの刺激など
<p>スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件</p>	<p>パラリンピック開催決定後の社会的変化が影響していると言える：仕事の形態：学校事務（嘱託・アルバイト）→保険会社へ。金銭の心配なく練習時間も確保できるようになった。県からの強化費も受けられるようになった。</p> <p>地元の先輩選手の支えや海外の選手の刺激、競技に対する向上心が車いすバスケットボール継続のモチベーションとなっている</p>
<p>今後のスポーツ実施</p>	<p>41、2歳の時にパラリンピックがあるのでそこまではトップ選手としていきたい。若い選手に日本代表はこういうものだということを伝えたい。</p> <p>それ以降も競技は続けたい。60代、70代でも続けたい。コーチをすることはなかなか難しい。気持ちが変わればコーチになることもあるかもしれない。</p> <p>学校訪問とかはこれからもどんどんやって子どもたちに体験してもらいたい。</p>
<p>まとめ</p>	<p>入院、リハビリ中は医療関係者の支えや影響が大きかった。</p> <p>家族や知り合いに福祉関係者や車いす利用者がいたことから車いすユーザーとなることに対する壁が低かったと考えられる。</p> <p>そうした環境にあったことから、障害者スポーツの存在を知っており、インターネットにより、車いすバスケットボールの情報に自らアクセスすることができた。</p> <p>県内にチームがあったこと、運転免許を取得できていたことからスムーズに開始できた。</p>

	<p>地元チームのメンバーの支えやアドバイス等もスポーツ開始の重要な要素である。</p> <p>スポーツ継続に際しては、仕事とプレーを両立できる環境にあることが大きな要素となっている。とりわけ企業就職後はプレーに専念できる環境にある。金銭的な負担はほとんどない。</p> <p>今後は41、2歳まではトッププレーヤーとして活動し、その後も現役としてプレーしたいと考えている。指導者になる可能性もあるが、今のところそれほど大きな希望ではない。</p> <p>ケガをする前は中学まで野球をしていたが、そのことは車いすバスケットボールをする上でもプラスに働いていると考えている。</p>
--	----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

(藤田紀昭)

仮名 20-I さん

インタビュー実施日時 場所 2020年10月1日 15:00-17:00 オンライン実施

個人基本情報	<p>居住 北海道地区 生年月日 1997年 性別 女</p> <p>障害発生年齢 14歳 障害内容 下肢切断</p>
略歴	<p>小学校、中学校とバスケットボール部に所属。中学2年時に骨肉腫を発症し、右膝下から切断。高校時代は、女子バスケットボールのマネージャーを務める。部活動を引退した高校3年時に、地元の車いすバスケットボールチームに自ら連絡して練習に参加。入部後、大学に進学しながら競技を続ける。車いすバスケットボールのジュニア日本代表に選出され、世界選手権（25歳以下）に出場。</p>
競技基本情報	<p>競技：車いすバスケットボール</p> <p>競技成績：2019女子U25世界選手権入賞</p> <p>競技開始年齢：バスケットボール：7歳、車いすバスケットボール：18歳</p>
障害発生から障害者スポーツ開始まで	<p>経緯</p> <p>骨肉腫発症時、医師から患部だけを切り、脚を残す治療法を提案される。両親もその治療法を勧めたが、足首の機能が戻らず走れなくなることを自分自身が受け入れられず、脚を残す治療法を拒否。足を切断して義足にしたら走れるかを医師に確認し、切断を決意。どんな形であれ、バスケットボールを続けたい意思が強かった。小学時代から、地元で車いすバスケットボールチームがあることを知っていたため、高校3年の部活動引退時に、車いすバスケットボールチームに連絡して練習に参加。</p> <p>始めた場所：チームの練習場</p> <p>重要な他者：特になし</p>
障害者スポーツ開始に影響を与えた社会的状況・環境・条件	<p>2006年、国際バスケットボール連盟が主催するFIBAバスケットボール選手権大会が日本で開催された。以降、メモリアル大会として、大会で使用された会場において交流大会が開催されることになった。大会は、幅広いカテゴリーの参加者が一堂に会し、バスケットボールの普及発展に加えて、生涯スポーツとして根付くことを目的としている。カテゴリーは、U-12、U-15、U-18、一般（専門、大学、社会人）、車いす、3×3で、それぞれの参加者が集まって大会が行われる。大会参加者は、障</p>

	<p>害の有無にかかわらず、地元で車いすバスケットボールのチームがあることを自然に認識して記憶に残っている。</p>
<p>受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響</p>	<p>小学6年時にミニバスケットボール大会で全国大会まであと一步のところまで勝ち進んでいたが、チーム内でインフルエンザが流行して、チームが勝ち上がることができなかった。ただ、当時の指導者が一つ一つのプレーに理由があることをわかりやすく説明してくれたために、自分で考えてプレーする癖がついた。それが現在、車いすバスケットボールの練習や試合で非常に生きている。</p> <p>中学時代の大会では、自らが骨肉腫を発症したため、最後の大会に参加できなかった。</p> <p>小学校、中学校と、最後の大会に悔いなく臨むことができなかったため、本人曰く「バスケットボールを引退できていない」。その経験が、車いすバスケットボールに挑戦するきっかけとなった。右足切断当時、パラリンピックへの出場を目標に車いすバスケットボールを始めたわけではなく、バスケットボールが好きで続けたいから車いすバスケットボールを選択した。</p>
<p>障害者スポーツ継続に関する状況</p>	<p>継続状況：車いすバスケットボールをやると、ただの障害者ではなくて、アスリートでいられる。ネガティブだった自分のイメージも変わった。障害に対する考え方、アスリートのマインドを教えてもらった。</p> <p>主な実施場所：車いすバスケットボールチームの練習場</p> <p>重要な他者：チームのキャプテン（ロールモデル的存在）</p>
<p>スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件</p>	<p>日本代表として世界選手権に出場した姿を、中学時代の顧問が見てくれた。生配信された試合の映像が涙で見えなくなったと後日連絡があり、日本代表で活躍することができれば、これまで関わってきた人に恩返しできると認識するようになる。これまで好きだから続けていた車いすバスケットボールに、日本代表として活躍することが新たな目標として加わった。国際大会に出場して、多くの人の目に触れることで、これまで支援してもらった人たちに、自分はこれだけのことができるようになったのだと伝えることができる。感謝を伝えられる。</p> <p>小学校の恩師がいる学校に、障害者スポーツの出前教室の講師として赴いた。大人になった自分を見せられた。</p>

今後のスポーツ実施	<p>自分がこれまでに経験してきたことや考えなどを子どもたちに伝えていきたいと考えているので、将来は教員になりたいと考えている。現在、大学でも教職課程を履修している。そのため、日本代表の活動は、ある程度の期限を持って進めていきたいと考えている。クラブチームの活動は、一生涯のスポーツとして続けられる限り続けていきたい。</p>
まとめ	<p>骨肉腫になり、右足首を残す選択肢もあったが、手術をしても最終的にバスケットボールができないのであれば、脚を切断してバスケットボールができる可能性を探りたいと、切断を決意。</p> <p>小学校、中学校とバスケットボールをして、右膝下の切断後も高校ではバスケットボール部のマネージャーをしていた。バスケットボールが好きなので、どんな形であれ続けたいと考えていた。</p> <p>車いすバスケットボールをする中で、切断したことに負い目があったが、チームメンバーと一緒に過ごすうちに、義足がむき出しの方がカッコいいと思えるようになった。</p> <p>パラリンピックに出場したいのが目標ではなく、車いすバスケットボールを続けたいのが目標であった。</p> <p>日本代表として世界選手権に出場したことで、多くの人が自分のプレーする姿を見てくれた。</p> <p>日本代表として活躍することが、これまで関わってきた人への恩返しになることが認識できたので、日本代表になることが新たな目標として加わった。</p> <p>自分の経験を子どもたちに伝えるために、将来は教員になりたい。</p>

(小淵和也)

仮名 20-Jさん

インタビュー実施日時 場所 2020年9月24日 15:00-17:00 オンライン実施

個人基本情報	居住 九州地区 生年月日 1955年 性別 男 障害発生年齢 23歳 障害内容 脊髄損傷 リハビリ期間 1年
略歴	1978年にスキー中の転倒事故により、脊髄損傷。脊髄固定手術後、関東地方の病院に転院して1年間のリハビリ。その時に、車いすバスケットボールに出会う。T県代表として全国障害者スポーツ大会に出場。1983年に車いすテニスに転向、1991年の全日本選抜車いすテニス選手権大会でメダリストとなり、翌年のバルセロナパラリンピックに出場。 引退後は、2012年ロンドンパラリンピック日本代表のサポートやジュニア育成などに従事する。現在、九州の総合型地域スポーツクラブの代表理事を務める。1991年に結婚、妻は言語聴覚士。
競技基本情報	競技：スラローム（1980年全国障害者スポーツ大会出場）、車いすバスケットボール（1981年～、1982、1983、1984、1985、1986、1987年全国障害者スポーツ大会出場）、車いすテニス（1983年～、1992年バルセロナパラリンピック出場） 競技成績：全日本選抜車いすテニス選手権大会メダリスト、バルセロナパラリンピック、車いすテニスシングルス・ダブルス出場） 競技開始年齢：スラローム：25歳、車いすバスケットボール：26歳、車いすテニス：28歳
障害発生から障害者スポーツ開始まで	・車いすバスケットボール 経緯① N県内のスキー場で、スキー中の事故により脊髄損傷となった。事故後、N県内の病院で固定手術を行い1か月入院。その後、T県のリハビリセンターに転院し、リハビリを1年間続ける。リハビリセンターの看護師の配偶者（夫）であるS氏が障害者スポーツ関係者で、いろいろと情報交換をするようになる。のちにS氏から車いすバスケットボールチームに誘われて入部する。リハビリ担当の理学療法士（PT）のK氏が、アーチェリー、車いすバスケットボール、スラロームなどを勧める。 経緯② 車いすバスケットボールチームに入部後、1979年の全国身体障害者ス

ポーツ大会（宮崎県）を見学。車いすの選手が一生懸命にプレーする姿に感動する。周囲の人たちが選手に向けて応援する姿にも感銘を受け、車いすに乗っていても注目してもらえることがあるんだと実感。車いすバスケットボールに没頭していった。

経緯③

1980年、大手新聞社の事業の一環で主催されたオランダ・アーネムパラリンピックツアーに参加。初めてパラリンピックを観戦。海外選手のレベルの高さ、コート内外での立ち居振る舞いを目の当たりにする。本人曰く、前年の全国身体障害者スポーツ大会（宮崎県）の感動の100倍の衝撃を受け、自分もパラリンピックに出場することを決意する。

始めた場所：都内の車いすバスケットボールチームの練習場。

重要な他者：①スポーツの世界へと誘ったりハビリ担当だった理学療法士・K氏。②チームへと誘ったりハビリ担当看護師の夫・S氏。

・車いすテニス

経緯④

1988年のソウルパラリンピック出場を目指して、車いすバスケットボールの練習に励む。日本代表強化指定選手に選出され、ストックマンデビル大会などの国際大会に出場するも、自身の持ち点に多くのライバルがおり、ソウル大会の日本代表に選出されなかった。

経緯⑤

パラリンピックに出場することを最優先事項として、出場競技を車いすバスケットボールから車いすテニスに変更。移行期はどちらの競技にも並行して取り組んでいたが、当時の恋人（現在の奥様）から、本気で目指すなら一つに絞った方が良くと背中を押されて、車いすテニスに絞り、バルセロナパラリンピック出場を果たす。

始めた場所：吉田記念テニス研修センター（TTC: Tennis Training Center）。

重要な他者：

・TTCのY理事長。当時は車いすテニスの練習場所がなく、その現状を聞き、練習場所としてTTCを開放してくれた。

・車いすテニスへの転向を後押しした当時の恋人（現在の奥様）。

<p>障害者スポーツ開始に影響を与えた社会的状況・環境・条件</p>	<p>大手新聞社が主催したパラリンピックツアー。パラリンピックを直接観戦できたことも大きいですが、同行したメンバーには、のちに車いすバスケットボール連盟の会長になる人がいた。本人が言うようにツアー参加自体が大きな転機になり、スポーツに熱中するきっかけとなった。</p> <p>T 県に複数の車いすバスケットボールのチームが存在していた。全国障害者スポーツ大会に出場する T 県代表チームを結成する際に、各チームから選出される中で出会った H 氏の存在が大きい。当時の障害者スポーツ界におけるスーパースター。アスリートとしての振る舞い、スティックさ、努力する姿勢など、影響力があった。</p>
<p>受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもの頃からスポーツ万能だった。 ・小学校は野球と水泳三昧。 ・中学校でハンドボール。高専ではサッカー。 ・高専卒業後は、地元で社会人サッカーチームを設立しリーグ戦に参戦。 ・基本的なボール感覚は、野球、ハンドボールと車いすバスケットボール、車いすテニスにも通ずるところがある。
<p>障害者スポーツ継続に関する状況</p>	<p>車いすバスケットボール</p> <p>日本代表としてパラリンピックに出場したく、厳しい練習もこなしていた。</p> <p>重要な他者：現在は障害者スポーツ界のレジェンドと呼ばれる H 氏。非常にスティックで、努力のレベルが違っていた。練習量や目標の高さなど、刺激になることばかりであった。</p> <p>車いすテニス</p> <p>継続状況：練習時間の確保、大会の遠征費が捻出でき、比較的、日程調整が可能な非常勤の仕事を 3 つ掛け持ちしながら、競技に集中できる環境を整えた。</p> <p>卒業、同棲、結婚など、自身の生活環境が変わっていく中でも調整し、2 時間半掛けて TTC に通った。</p> <p>主な実施場所：吉田記念テニス研修センター（TTC: Tennis Training Center）。</p> <p>重要な他者：①生活環境が変わる中でもささえてくれた妻 ②トレーニングを指導するコーチ N 氏。初めての指導者。大会にも帯同。</p>

<p>スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ TTC が練習環境と指導者を提供してくれた。 ・ 車いすバスケットボールから車いすテニスに転向した選手と一緒に練習できた。
<p>今後のスポーツ実施</p>	<p>車いすテニスの日本代表強化に力を注ぐ。 総合型地域スポーツクラブの代表理事の立場から地域の障害者のスポーツ環境を整備する。</p>
<p>まとめ</p>	<p>パラリンピックを直接観戦したことで、自分も出場したいと大きな夢をもらった。</p> <p>車いすバスケットボールでの出場が厳しくなり、当時の恋人（現在の妻）の後押しもあり、車いすテニスに転向。日本一となり、パラリンピック出場を果たす。</p> <p>車いすテニスの練習環境を提供してもらったことで練習に集中して取り組むことができた。</p> <p>上手になりたい一心で、スーパースターの背中を追い続ける。H 氏とともに練習する中で、アスリートとしてのあるべき姿を学ぶ。</p>

(小淵和也)

仮名 20-K さん

インタビュー実施日時 場所 2020年11月5日 15:00-17:00 オンライン実施

個人基本情報	居住 関東地区 生年月日 1980年 性別 男 障害発生年齢 24歳 障害内容 視覚障害
略歴	中学・高校一貫の進学校の柔道部に所属、中学1年時にキャプテンに任命され、そのまま6年間務める。高校卒業とともに柔道と一時的に離れる。浪人1年目に右目の緑内障を発症。神経が痛む病気で一度失った視野は戻らず、右目の視力を失う。手術後、再び予備校に通い、3浪後に大学に合格して上京。大学2年時に左目の緑内障を発症。薬でも点眼でも眼圧が下がらず、急遽手術をする。手術前に聞いていた通り、視神経へのダメージが増して見えにくくなる。歯磨きできず、ご飯も食べられず、文字が読めず、人の顔の判別ができなくなる。手術後、大学には休学せずに通うが、これまで通りとはいかず、友達、家族、大学のサポートも受けながら単位を取得する。同じゼミの友人にサポートしてもらいながら、なんとか大学を卒業。当時付き合っていた恋人に、視覚障害者柔道を紹介されて、取り組み始める。就職活動では、100社以上受けた中で2社のみ面接まで進み、その中の1社（特例子会社）に就職する。その後、世界選手権、北京パラリンピックに出場。2011年に、当時の恋人（現在の奥様）の後押しを受けて起業する。事業も軌道に乗り、様々な団体・組織の理事をする傍ら、現在は複数の会社の代表取締役社長を務める。
競技基本情報	競技：視覚障害者柔道 競技成績：柔道（高校2年、3年時に県大会で入賞、二段、国体の強化選手に選出）、視覚障害者柔道（2006年フェスピック競技大会メダリスト、2008年北京パラリンピック出場、2010年アジアパラ競技大会メダリスト） 競技開始年齢：柔道：13歳、視覚障害者柔道：25歳
障害発生から障害者スポーツ開始まで	経緯 当時の恋人に視覚障害者柔道があることを紹介され、発症後、初めて自分で何かをやってみようと思えた。日本視覚障害者柔道連盟に電話すると、3か月後の大会出場を提案される。7年ぶりに柔道の練習を再開す

	<p>る。出場すると決心すると目標ができて新鮮な気持ちになった。初めて出場した大会で、全て一本勝ちで優勝する。本人曰く「そこから人生が変わった」。</p> <p>始めた場所：高校時代の同級生が集まり練習相手となる。</p> <p>重要な他者：当時の恋人、高校の同級生</p>
<p>障害者スポーツ開始に影響を与えた社会的状況・環境・条件</p>	<p>当時の恋人が情報収集をして提案してくれた。柔道以外のスポーツを提案されてもおそらく選択はしなかった。昔からやっていた柔道だから取り組もうと考えられた。いざ、練習をすると、練習相手として高校の同級生が手伝ってくれた。視覚障害者柔道が晴眼者とでも練習可能な競技特性も後押しとなった。</p> <p>日本視覚障害者柔道連盟が、適切な情報を提供してくれた。</p> <p>初出場で優勝した大会が記念大会で、当時の皇太子と直接話す機会に恵まれる。加えて、翌年の世界選手権、アジア大会の日本代表に選出され、視力喪失により全く白紙だったスケジュールが柔道によって埋まり始めた。</p>
<p>受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響</p>	<p>中・高校と柔道部であったために、身体的にも、精神的にも余裕を持って、柔道に取り組めた。</p>
<p>障害者スポーツ継続に関する状況</p>	<p>継続状況</p> <p>2006年に出場した初の国際大会（世界選手権）で惨敗。海外選手の強さを目の当たりにして、これまでの練習を見直し、より一層練習に取り組むようになる。練習内容の変更、練習相手や環境を自らが積極的に動いて探した。同年に開催されたフェスピック大会（アジア大会）で金メダルを獲得して、2008年の北京パラリンピックに出場。</p> <p>主な実施場所：練習の受け入れ先を自らで探す。</p> <p>重要な他者：</p> <p>M氏（視覚障害者スポーツのレジェンド的存在の先輩。発症後（20歳）に柔道を始めて現在も現役選手。全盲を言い訳にせず、人生において自分のやりたいことには何でも挑戦する姿に日々刺激を受けている。</p> <p>M氏が柔道を開始した時は体重が60キロしかなかったのに10年掛</p>

	<p>けて筋肉をつけて 100 キロの体を作り上げたと聞き感銘を受けた。努力がこれほど人を強くするのかと実感した。M 氏が引退するまでは、自分も引退できないと考えている)</p> <p>H 氏 (レーベル遺伝性視神経症：出会った当初、すでにパラリンピックのメダリストであったが、階級も異なり実力差があった。そこから 10 年後に同じ階級で対戦して敗退。努力の人。毎日 10 キロ走って、体がどんどん強くなって、技術力がどんどん向上していった。毎日努力を続けることで、こんなにも強くなれるのかというのを見せてもらった。武道の美しさ、すごさを教えてもらった)</p>
スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件	<p>会社がアスリート支援制度を設立して予算的にサポート。練習時間が確保でき、トレーニングジムの費用も賄えた。</p> <p>ブラジリアン柔術の道場が近所にあり、寝技の練習ができた。</p>
今後のスポーツ実施	<p>柔道は好きなのでライフワークとしては継続していく。選手として継続するかは、2021 年の東京パラの状況を見て決めたい。どのように気持ちが動くのかは、その時になってみないと何とも言えない。</p>
まとめ	<p>発症前の柔道経験が発症後の視覚障害者柔道の開始にプラスに働いた。</p> <p>発症時に友人、恋人がサポートしてくれたことで精神的に安定した生活を送ることができ、その重要他者からの視覚障害者柔道の紹介だったため、スムーズに受け入れられた。</p> <p>高校時代の同級生が練習相手となり、視覚障害者柔道の開始の後押しをしてくれたので、孤独にならずに競技を続けられた。</p> <p>視覚障害者柔道の世界で当事者と出会い、M 氏、H 氏と過ごす中で、視覚障害者として生きていく指針を示してもらった。</p> <p>高校時代の同級生が社会で活躍している姿に刺激を受けて、自分も胸を張る生き方をしたかった。パラリンピックがその準備をすべて整えてくれた。起業し、充実した仕事ができるようになって初めて障害を受容できた。同級生にも胸を張ることができた。</p>

(小淵和也)

仮名 20-L さん

インタビュー実施日時 場所 2020年10月26日 10:00-12:00 オンライン実施

個人基本情報	<p>居住 関西地区 生年月日 1988年 性別 男</p> <p>障害内容：右上腕の上肢 1/2 欠損（先天性）</p>
略歴	<p>大学院修了後、独立行政法人に就職し、その後 2016 年にアスリート雇用で T 社に転職し競技を継続している。</p>
競技基本情報	<p>競技：パラバドミントン（SU5 クラス）</p> <p>競技成績：日本障がい者バドミントン選手権大会（シングルスメダリスト：2011年・2012年・2014年・2016年/ダブルスメダリスト：2011～2017年）/2014年アジアパラ競技大会（ミックスダブルスメダリスト）/2016年アイルランドパラバドミントンインターナショナル（ダブルスメダリスト）/2016年インドネシアパラバドミントンインターナショナル（ダブルスメダリスト）/2017年ペルーパラバドミントンインターナショナル（シングルスメダリスト・ダブルスメダリスト）</p>
障害発生から障害者スポーツ開始まで	<p>保育園の頃からサッカーを始めて、小学校までは地元のサッカークラブで活動し、中学校からは部活動として取り組んでいた。小学校時代の体育に関して、鉄棒と縄跳びは苦手であったが、それ以外のバスケットボールやドッジボール、サッカー等、特に球技は人並み以上にできてとても楽しかった。当時、他の生徒と違うことをするのがすごく嫌で、鉄棒の補助器具を教員が準備してくれた際、その器具は障害児専用ではなく鉄棒の苦手な健常児を補助するためであったが、「自分の腕がないからそういうものを使ってもらっている」と解釈して嫌悪感があり、使うことを拒んで教員を困らせていた。</p> <p>高校入学後、サッカー以外の種目に取り組みたいと思い、進学先の部活動で中学校になかった種目がハンドボールとバドミントンであり、中学校時代のサッカー部の先輩がバドミントン部に入っていたことから自分も入部した。その後、大学でもバドミントン部で競技を続け、大学卒業後は地域の社会人クラブで活動を継続し、現在は複数の大学、高校、クラブチームを活動拠点としている。</p> <p>パラバドミントンとの出会いは、大学2年生の時（2008年）に他大学の選手から当時の協会強化コーチであった K 氏を紹介され、K 氏が所属</p>

	<p>する地元の障害者バドミントンクラブの練習に参加したことがきっかけであった。その後、2011年から日本代表の強化指定選手となり、国内外の大会に出場している。</p>
<p>障害者スポーツ開始に影響を与えた社会的状況・環境・条件</p>	<p>パラバドミントンに出会った当初は、自分自身を「障害者バドミントン」のカテゴリーに当てはめることに葛藤があったが、大会に出場する中で、国内外に自分より強い選手がいることを知り、まずはそれらの選手に勝たなければいけないと思うようになった。次第に「自分自身を障害者だと思いたくない」という気持ちは薄れていき、国際大会に出場してメダル争いができるという経験は貴重なものなのだと考えるようになり、自然と障害を受け入れられるようになっていった。</p> <p>当時の強化コーチであったK氏と知り合いパラバドミントンの世界に入ったが、高校3年生の頃から障害者バドミントンの存在を知っていたものの、当時の協会ホームページにほとんど情報がなく、「上肢障害」という表記は目にしたが、どの程度の障害を指すのか、自分自身がプレーできるのかもわからず、その時に自分からアプローチをすることはなかった。</p> <p>また、初めて日本代表合宿に参加した際に出会った同じクラスの選手たちに刺激を受けた。特にU選手には初めて日本選手権に出場した時に負けてしまい、レシーブ力があり攻撃的ではないがミスをしないというプレースタイルから多くのことを学ぶことができ、U選手に勝つということがパラバドミントンを始めた当初の目標となった。同様に、車いすクラスのN選手は自分と同じく理系の大学院を修了し、メーカーの研究職に就きながらトップレベルで競技を続けており、競技を始めた当初は自分もN選手のように仕事と競技を両立したいと考えていた。</p>
<p>受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響</p>	<p>—</p>
<p>障害者スポーツ継続に関する状況</p>	<p>2009年に初めて日本選手権に出場し、メダリストとなり翌年のアジアパラ競技大会の派遣候補選手に推薦されたが、派遣選考会と大学の部活動の大会との日程重複により辞退した。2010年の日本選手権では、4回</p>

	<p>生となり大学の部活動はすでに引退しており準決勝敗退となってしまったが、翌年から強化指定選手となり、国際大会に出場するようになった。そして、2014年に2020年の東京パラリンピックにパラバドミントンが採用されることが決定し、当時（大学院から独立行政法人在職中）は練習が週2～3回に留まっており、仕事と競技の両立ができていなかったことから、東京パラリンピックを見据えてアスリート雇用を考えるようになり、2016年から現所属のT社に入社し競技に専念できる環境となっている。</p>
<p>スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件</p>	<p>パラバドミントンに取り組む中で、当時の日本代表コーチであったT大学のK先生に強く影響を受けた。2011年の世界選手権、2012年のアジア選手権に帯同してもらい、バドミントンへの考え方、配球や基本的な技術を教わり、今まで高校・大学と専門的な指導者がいなかったのも、初めて「コーチ」という存在に出会った気がした。このコーチのもとでプレーするのは本当にやりがいがあるなと思い、自分のバドミントンに対する考え方そのものに大きな影響を与えた。</p> <p>アスリート雇用に転換後、現在（コロナウイルス感染拡大前）は週5回の練習に加えて、週1～2日程度トレーニングを行っているが、バドミントンの練習に関しては3か所が主な活動拠点となっている。元協会コーチが在籍する大学と、学生時代に学連の活動でお世話になった教員の在籍する大学と、全国大会常連の高校で練習を行っている。</p> <p>複数の拠点で練習を行うメリットとして、常に同じメンバーではなく異なる学生たちと活動することで、常に刺激があり緊張感を維持できることが挙げられる。その一方で、学生の大会等のスケジュールを基準として練習メニューが設定されるので、自分自身の試合が近づいていても基礎練習をしなければならないケースが出てくることがあり、練習メニューのミスマッチに苦慮することがある。</p>
<p>今後のスポーツ実施</p>	<p>自分自身の競技力が上がっていくのが感じられているうちは競技を続けたいと思っている。30歳を超えているが、バドミントンを始めたのが高校生からということがあり、アスリート雇用に転換をして、ここ数年でも競技力が上がってきているという実感がある。今年は肩のケガの影響で停滞してしまったが、回復して2019年以上のパフォーマンスが発</p>

	<p>揮できているので、当面は現役を続けたいと思っている。</p> <p>2024年のパリパラリンピックを目指せるかどうかはわからないが、あと1~2年競技を続けていき、厳しいと思えばその時には引退すると思う。</p>
<p>まとめ</p>	<p>小学校時代から学校体育は一部苦手な種目があったが、他の健常児と同様に取り組むことができた。</p> <p>保育園から中学校までサッカーを続け、高校からバドミントンを始めた。</p> <p>大学時代にパラバドミントンに出会い、当初は「障害者」の категорияに入ることに抵抗があったが、国内外の大会に参加する中で、ロールモデルとなる選手や指導者との出会いによって、専心的に取り組むようになった。</p> <p>パラバドミントンのパラリンピック採用決定を機に、アスリート雇用に転換し、競技中心の生活を送っている。</p> <p>2024年のパリパラリンピックを目指すかどうかはわからないが、自分自身が上手くなっていると感じられるうちは競技を続けていきたいと考えている。</p>

(河西正博)

仮名 20-M さん

インタビュー実施日時 場所 2020年8月23日 15:00-16:30 オンライン実施

個人基本情報	<p>居住 九州地区 生年月日 1977年 性別 男</p> <p>障害発生年齢 18歳 障害内容 脊髄損傷 リハビリ期間 約1年</p>
略歴	<p>事故前 高校生 未婚</p> <p>現在、福岡の会社でアルバイト（事務）</p>
競技基本情報	<p>競技：陸上（T53）、</p> <p>競技成績：全国障害者スポーツ大会（100m・200mメダリスト）、IPC 公認世界ランキング 30位以内(自己最高)</p> <p>競技開始年齢：陸上(25歳頃～)</p>
障害発生から障害者スポーツ開始まで	<p>経緯：高校を卒業する直前、車で運転中の事故により脊髄損傷となった。リハビリ期間は1年程度。リハビリの一環で車いすテニスを入院患者同士で行っていた。リハビリ後はコンピュータ系の専門学校に通い、医療系に就職。スポーツは全く行っていなかった。25歳頃、せき損センターで知り合った同じ障害のパラ陸上の選手から、練習を見においでと誘われ、体験をしたことがきっかけとなり車いす陸上を始めた。1～2年の間は、同じ障害レベルの選手から昔使用していた競技用車いすを借りて練習を行った。最初はリハビリの一環で行っていたが、練習を一緒に行うメンバーに日本代表選手がいたこと、大会に出る度にタイムが良くなったことから、競技者として取り組むようになった。また、大分国際車いすマラソンを直接見に行ったことも影響している。最初は自己流で練習を行ってきたが、2017年頃、同じ障害クラスの選手から指導を受けたことがきっかけとなりパラリンピックを目指すようになった。</p> <p>始めた場所：九州地区の車いすが走行できる道路（車いす陸上の選手らの練習場所）。現在は、九州地区の陸上競技場。</p> <p>重要な他者：せき損センターで出会った車いす陸上選手。日本選手権で出会った車いす陸上選手。障害者スポーツセンター職員。</p>
障害者スポーツ開始に影響を与えた社会的状況・環境・条件	<p>入院中は障害者スポーツのことは考えたことがなかったが、せき損センターで出会った車いす陸上選手から車いす陸上を見に来ないかと誘われたことがきっかけとなり車いす陸上を始めた。競技用の車いすを持っていなかったが、同じ障害レベルの選手から昔使用していた競技用車いすを借りて練習を行えたことも競技の継続につながっている。</p>

<p>受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもの頃から運動が好き。 ・小学校時代はソフトボール。中学校、高校はバレーボール。 ・仲間と楽しくスポーツを行ってきた。
<p>障害者スポーツ継続に関する状況</p>	<p>継続状況：以前は週に5回練習していたが、現在は新型コロナウイルス感染拡大の影響で週に1~2回と減っている。アスリート雇用ではないため、練習や大会にかかる費用はすべて自費。専属のコーチはいないが、一緒に練習を行っている日本代表選手にフォームの改善などアドバイスをもらっている。トレーニングについては、ボランティアでトレーナーから指導を受けている。事故後からいつも応援してくれている弟がおり、大会を見に来てくれている。</p> <p>主な実施場所：九州地区の陸上競技場</p> <p>重要な他者：車いす陸上日本代表選手。弟。</p>
<p>スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件</p>	<p>練習可能な陸上競技場があり、パラリンピック開催決定の影響等で以前と比べ車いすが使用しやすくなったこと。</p> <p>練習を行う選手の中に日本トップレベルの選手がおり、的確なアドバイスを受けることができること。</p> <p>トレーナーからのトレーニング指導を受けられること。</p>
<p>今後のスポーツ実施</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・パラリンピック出場を目指す。
<p>まとめ</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・せき損センターで知り合った同じ障害のパラ陸上の選手からの誘いでリハビリの一環として車いす陸上を始めた。 ・競技用車いすは持っていなかったが、同じ障害レベルの選手から昔使用していた競技用車いすを借りて練習することができた。 ・練習仲間に車いす陸上日本代表選手がいたこと、実際に大会を見たことがきっかけとなり、本格的に競技を始めた。 ・専属のコーチはいないが、パラリンピックを目指す日本代表選手らと練習ができる環境があること、トレーナーの支援があることはスポーツ継続に影響している。

(兒玉 友)

第2章

コロナ禍におけるアスリートの活動状況調査

調査概要

本調査は、第1章「障害者スポーツ選手のキャリア調査」の一環で実施した。

(1) 調査目的

新型コロナウイルスの感染拡大に伴う緊急事態宣言（2020年4月7日発出）により、日常生活をはじめ、練習環境や大会参加など行動が制限された障害者アスリートの実態を調査する。

(2) 調査内容

- ・緊急事態宣言時の対応
- ・感染リスク対応
- ・コロナ禍での考え方、行動のあり方
- ・コロナ禍で困っていること

(3) 調査対象

障害者アスリート（現役・引退含む）13名

(4) 調査期間

2020年7月～2020年12月

(5) 調査方法

あらかじめ決めておいた質問項目に自由に回答してもらった半構造化インタビューにて実施した。

(6) その他

2021年1月に首都圏を中心に緊急事態宣言が発出されたが、本調査における「緊急事態宣言」は、特に記載のない限り、2020年4月発出の緊急事態宣言を指す。

1.新型コロナウイルス感染拡大の経緯

世界保健機関（WHO）が中国の原因不明の肺炎について、新型コロナウイルスが検出されたと明らかにしたのが2020年1月14日のことである。それ以降、世界的な感染拡大は止まることはなく、2020年3月下旬に東京オリンピック・パラリンピックの延期が発表される。わが国では、新型インフルエンザ等対策特別措置法（以下、特措法）に基づく「緊急事態宣言」が発令されることになる。緊急事態宣言に係る主な動きについて、内閣官房「新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言の実施状況に関する報告」を参考に時系列でまとめた。

①新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言（2020年4月7日発出）

実施期間を2020年4月7日～5月6日までとする。実施区域は、埼玉県、千葉県、東京都、神奈川県、大阪府、兵庫県及び福岡県の7都府県。

②新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言の区域変更（2020年4月16日発出）

実施区域を全都道府県とする。北海道、茨城県、埼玉県、千葉県、東京都、神奈川県、石川県、岐阜県、愛知県、京都府、大阪府、兵庫県、福岡県の13都道府県については、特に重点的に感染拡大の防止に向けた取組を進める「特定警戒都道府県」とした。

③新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言の期間延長（2020年5月4日発出）

実施期間を5月31日まで延長。

④新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言の区域変更（2020年5月14日発出）

実施区域を、北海道、埼玉県、千葉県、東京都、神奈川県、京都府、大阪府、兵庫県の8都道府県とする。

⑤新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言の区域変更（2020年5月21日発出）

実施区域を、北海道、埼玉県、千葉県、東京都、神奈川県の5都道府県とする。

⑥新型コロナウイルス感染症緊急事態解除宣言（2020年5月25日発出）

緊急事態措置の実施が必要なくなったと認めたため、緊急事態の終了を宣言。

こうして、2020年4月7日に発出された緊急事態宣言は、約1か月半ぶりに全国で解除された。本調査では、当時の緊急事態宣言時の対応を中心に障害者アスリートの事例についてまとめた。

2.緊急事態宣言時の対応

緊急事態宣言が発出されていた期間の過ごし方について、日常生活、目標設定、メンタルコントロール、トレーニング方法など多岐にわたってたずねた(表 2-1)。緊急事態宣言は、4月7日の発出後、実施区域の変更を経て、5月25日まで続く。そのため、居住地により、実施期間に違いが生じている。

施設の閉鎖

緊急事態宣言の期間中は、全国のほとんどの施設が閉鎖となっていた。障害者アスリートが利用する民間のスポーツ施設や公共スポーツ施設なども同様に閉鎖となっており、これまで行っていた練習を中止せざるを得ない人もいた。また、他県に練習場がある人は、県を越えた移動が制限されたことで、これまで使っていた練習場が使えなくなった。

自宅でトレーニング

ケガで療養中のアスリート以外は、代替手段として、自宅において、できる範囲で体を動かすトレーニングをしていた。筋力トレーニングや素振り、車いすのチェアワークの練習や、自宅の駐車場に走路台を設置して自転車のトレーニングを行う人もいた。ほとんどのアスリートが実践的な練習に取り組むことができなかった。

練習の再開

緊急事態宣言が終了してからも、感染のリスクに考慮しながら、できる限り人に会わないことに務め、個人が工夫しながら屋外での練習を少しずつ再開させた。ただ、これまで通りのトレーニングを積みなかったこと、パラリンピックの予選、本番に向けての先行きが不透明なことが、精神的な負担も増大させたことが見てとれる。一方で、トレーニングできない期間を、過去の映像を見返したり、データ分析を行ったり、学業に取り組んだり、資格取得の時間に充てるなど、別の時間として有効に活用するアスリートもいた。

表 2-1 緊急事態宣言が発出された時の過ごし方

No	緊急事態宣言が出た時の過ごし方
1	練習場が閉鎖されていたため、ボールを使った練習はできなかった。 通っているスポーツジムも閉鎖されたため、自宅でするトレーニング(腹筋、背筋、体幹等、過去のビデオを見たり等データ分析)をしていた。
2	4月是他県で練習していたが、県境の移動も制限されたため、5月以降は練習をやっていなかった。連盟から連絡があり、在宅で筋力トレーニングをやったが、矢を使った練習は一切しなかった。
3	2月末に発症した褥瘡のため、本格的に練習ができなかった。病院勤務のため、情報を持っており、極力外出を控え、人に会わないようにしていた。トレーニングはほとんどしていなかった。
4	体育館、スポーツ施設が利用できなかった。外出して、車いすを漕いだり、ハンドサイクルを1時間~1時間半ほど、行っていた。自宅ではダンベルを使ったトレーニングや競技用車いすを使って切り返しのチェアワークや素振りをした。実践的練習は行っていない。
5	スポーツジム、トレーニング施設がすべて閉鎖されていた。散歩や自転車に乗る以外は、自宅で体幹トレーニングをしていた。なかなか先が見えない中で、毎日のトレーニングを続けるということが本当に苦しかった。
6	3月以降は、クラブには行かずに、自宅でトレーニングを開始した。自宅では、走路台をセッティングして、バイクに乗った。外の人気がないところに走りに行った。スイムはまったくやらなかった。
7	自宅でトレーニングをしつつ、学業に専念していた。2月末から体育館が休館だったので、チームとしての活動はしなかった。4月以降、大きな公園でチームで集まって、週に1回、陸上競技用の車いすを使用してトレーニングを行った。空いている場所で、ボールを使ったパス練習などもしたが、それほどできなかった。
8	肩のケガから回復して練習を開始する時期に緊急事態宣言に入った。トレーニングはランニングか、自宅で筋力トレーニングをすることを毎日繰り返した。指導者関連の資格の勉強をしていた。
9	2月に日本で開催を予定していた国際大会が中止となり、練習もできない状況になった。4~6月は極力外出は控えた。少し体は動かしていたが、対人練習は全くしていなかった。

3.感染リスク対応

新型コロナウイルスの感染を抑えるために、アスリートとしてどのように対応してきたかについてたずねた(表 2-2)。

新しい生活様式

毎朝の体温チェック、日常的な手洗いやマスクの着用、練習場での手指の消毒などを徹底していた。トップアスリートとして、自らの行動が周囲の人に迷惑をかけることにもつながることを意識しており、新しい生活様式に合わせた行動をしていた。中には、人との接触を可能な限り回避して、3食を自宅で自炊し、購入したものはすべて消毒するなど、徹底的に

リスク回避の行動をとるアスリートもいた。多くの情報が耳に入ってくる中で、何を自分が選択するのかを冷静に考えながら行動していた。

練習方法の変化

密にならない環境を自ら作るように意識し、少人数での練習を心掛けていた。不特定多数の人たちが出入りするような場での練習は避け、顔が見える相手との練習、その日、誰と接したのかがわかるように記録するようになった。リモートでのトレーナーからの練習指示に合わせて個人で練習に取り組むアスリートもいた。

表 2-2 感染リスクを抑えるためにやってきたこと

NO	感染リスクを抑えるために選手としてやってきたこと
1	練習は2~3人で行う。誰と接触したか明確になるように気を付けている。日常生活から、手洗い、マスク着用を心掛けている。
2	地元の射場で練習していた。密にならないように気を付けて、消毒液を常備し、頻繁に手指消毒等をした。車いす自体を消毒するように指示があったが、実際にはできない。そのため、帰宅後、車いすにスプレー消毒を施した。
3	毎朝の体温チェックと、アルコール消毒を徹底した。
4	車いすへの消毒指導があったが、無理だった。やれる範囲で対応した。夜の街に行かないようにするなど、新しい行動様式に合わせて、日常生活を送っていた。
5	ガイドラインは細かく作った。屋外競技なので、三密を回避するよう感染予防に努めた。
6	人と触れ合わないよう心掛けて、さらに気分転換も適宜行えるように、散歩やトレッキング、自転車などを多めに取り入れた。三密を回避する、手洗いやマスク着用、あまり人に会わないようにはしている。
7	基本的には外出しなかった。自宅で3食自炊して、どうしても外出が必要な時は、完全防備して出かけた。購入したものは、すべて消毒した。徹底的に行うようにした。いろんな情報が入ってくるが、その中でも、何を自分が選択するかが重要だと思った。
8	強化指定選手という立場上、万一感染したら、周囲にも迷惑をかけるので極力外出は自粛した。トレーニングジムにも通うのは止めた。リモートでトレーナーからトレーニング方法を教えてもらっていた。
9	練習は顔が見える人の場合に参加していた。外部の人や関係者以外の人に参加する環境はできる限り回避した。練習する場所には、消毒液を常備した。先日参加した大会も、試合以外の時間はマスクを着用し、消毒もこまめに行った。体温測定は、コロナ感染拡大前から日常的に行っていたのでこれまで同様に継続しているという感覚である。公共交通機関での移動も単独での移動を心掛けている。

4. コロナ禍での考え方・行動のあり方

アスリートとして、多くのことが制約されている環境下において、自身が大切にしている考え方や行動のあり方などについてたずねた(表 2-3)。トップアスリートとしての振る舞いを意識する人、周囲の人たちの考え方を尊重しつつ、自らは慎重すぎるほど慎重に行動する人、これまで行っていたことが、今本当に必要なのかを精査するようになった人などがいた。

表 2-3 コロナ禍での考え方・行動のあり方

No	コロナ禍での考え方・行動のあり方
1	他のアスリートの手本にならないといけないという思いと、トップアスリートとして恥ずべき行動をしないようにしないといけないという思いがある。
2	コロナ禍とはいえ、コンディションを保つ意味で、週末の練習時間は確保するようにしている。
3	コロナに対する考え方は人それぞれ。自分は石橋を叩いて渡るタイプなので、慎重に慎重に行動するようにしている。
4	新しい行動様式に合わせた日常生活を送っている。
5	自分が感染しているかもしれない、いつ感染してもおかしくないという認識でマスクを着用して行動するようにしている。リスク回避のために、代替方法があるか、本当に今じゃないとダメなのか、一度、精査するようになった。

5. コロナ禍で困っていること

東京パラリンピックを迎えるにあたり、コロナ禍で困っていることについてたずねた(表 2-4)。東京パラリンピックに向けた予選会の中止・延期、それに向けた海外遠征や練習会の中止・延期など、現時点では、なかなか開催が決まらない中で、不安ばかりが大きくなり、練習場所をいかに確保していくのか、目標をどう設定していくのか、モチベーションをどう維持していくのかなどに苦勞していることが見てとれる。

表 2-4 コロナ禍で困っていること

No	コロナ禍で困っていること
1	東京パラリンピックの選考がまだ完全には終わっていない。国際大会の結果によって決まるので、いつ再開されるかが一番の不安。
2	コロナ禍で練習もままならない。東京パラリンピックという目標があるので、モチベーションを維持できている。
3	トレーナーから指導を受けていたが、今はトレーニングルームが使えないので、今は全くやっていない。自分や練習仲間と走るのみとなっている。
4	パラリンピックというような目線で考えた時、ありとあらゆる情報が出てくる。やる・やらないを含め、やりたい・やりたくないも含めて。そういうのはある意味雑音で、ある意味では世間の声なので、その辺を聞きすぎると、ある種ノイローゼになるというか、それに振り回されているところは出てきてしまうのかなと思う。
5	練習や海外遠征がどうしても少なくなってしまう。経済と感染予防は矛盾するけれどやっぱりやらなきゃいけない。
6	遠征時の不安感など、個人差がある。例えば遠征時の飛行機の座席、移動のチームバン、ホテルの部屋、会場の休憩場所など、三密になることを回避しようと思うと、気になる点が多い。もし、関係者が感染した場合の対策はどうするのかについても、具体的内容を知っておきたい。
7	海外の大会には行くのが難しく、ずっと国内でトレーニングを続けているだけなので、それが少し寂しい。海外のレースの様子などを映像で見ると、スタート直前までマスクを着用していたり、ゴールしてもハグやタッチは禁止など、注意しながら運営されている。まだまだ安心してレースに臨める環境ではない。
8	チームメンバーが各地から集合するので、いつ再開されるのかわからず不安である。再開を心待ちにしているが、どこへ向かっていいのかわからない。 強化合宿の参加時は、感染対策に気をつけていても、飛行機の移動などで密の環境は避けられない。遠征先での公共交通機関の利用も怖い。感染者の多い東京に集まったの練習・合宿は、地方から参加する場合は、ハードルが高い。
9	自分の練習拠点で練習できていないのは不安が大きい。
10	これまで出稽古していたのができなくなり、練習場所がなくなってしまった。 ベンチマークとして大会出場を目標としていたが、中止となり目標設定ができなくなった。ただ強くなる、というだけではモチベーションの維持が難しい。

6.まとめ

新型コロナウイルスの影響による身体活動の変化について世界的に研究した Tison らは、世界的に歩数の減少があったことを報告している。Tison らの研究では、2020年3月11日のWHOによる新型コロナウイルス感染症パンデミック宣言前後の2020年1月19日から6月1日までの歩数(スマートフォンのアプリで計測された歩数)の変化を見ている。WHOの宣言を機にロックダウンした国や緊急事態宣言を発出した国など、時期や変化の程度は

国や地域によって異なっている。日本においては、自粛ムードが現れ始めた緊急事態宣言の1か月以上前から身体活動が減少、具体的には、1日あたり約3000歩の歩数減少が明らかになっている。本調査では、世界的にも身体活動が低下している時期において、障害者アスリートがどのように過ごしてきたのか、また、どういった考えで行動しているのかを、インタビューから明らかにしている。

2020年に発出された緊急事態宣言は、障害者アスリートに限らず、日本国民すべてにとって初めての経験となった。国内の多くの施設が閉鎖となり、普段から使用していたスポーツ施設の閉鎖や県を越えた移動の制限などにより、多くのアスリートが練習の拠点を失い、結果として、練習できる環境は、自宅、もしくは自宅周辺に限られた。そういった環境下においても、自宅で工夫してトレーニングしたり、過去の映像を見直したり、学業や資格取得に向けた勉強に取り組むなど、時間を有効的に使うアスリートが多かった。情報過多の社会では、新型コロナウイルスに関する情報は、濃淡問わず様々な内容が至る所から耳に入るが、すべての情報に左右されることなく、自分自身で情報を見極め行動に移していこうとする姿勢は印象的であった。一方で、パラリンピックの予選や本番に向けた練習が行えないなど、先行きが不透明な状況下で、不安を抱えているアスリートがいたことも見逃せない事実である。

緊急事態宣言の解除後、感染リスクを抑えるために、自らの行動や立ち居振る舞いに変化があったアスリートもいる。新しい生活様式に合わせた日常的な手洗いやマスクの着用、手指の消毒などはもちろんだが、練習相手も感染リスクを軽減するために少人数、顔の見える相手に制限するようになった。また、自身の行動で周囲に迷惑がかからないようにと、これまでだったら移動や対面が伴っていた行動に関しては精査して行うようになった。

2021年1月、国内では首都圏を中心に、再び緊急事態宣言が発出された。新型コロナウイルス収束の目途が立っておらず、アスリートだけでなく、多くの国民も不安を抱えている。今回のインタビュー調査は、コロナ禍における障害者アスリートの実態を把握するために実施したものであるが、困難に直面しても、自身の感情をコントロールし、現在の置かれた環境下でできることを積み重ねることを続けてきた障害者アスリートの立ち居振る舞いは、コロナ禍だからこそ、障害の有無にかかわらず、多くの国民やアスリートにとっての見本になるのではないかと考える。

(小淵和也)

〈参考文献〉

内閣官房「新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言の実施状況に関する報告」.令和2年6月.

Tison GH et al. Worldwide Effect of COVID-19 on Physical Activity: A Descriptive Study. Ann Intern Med. 2020.日時：2019(令和元)年8月1日

第3章

ユニ・スポ体験での児童の意識変容調査

1 チャレンジ！ユニ★スポについて

「チャレンジ！ユニ★スポ」とは、“健常者と障害者の相互理解促進”や“共生社会実現への貢献”を目的に、“静岡県内の特別支援学級がある小・中学校の児童・生徒・教員”を対象に障害者スポーツ「ボッチャ」をユニバーサルなスポーツ教材と位置づけた体験授業で、当財団が（公財）静岡県障害者スポーツ協会、筑波大学体育系 准教授 齊藤まゆみ氏の協力や指導を得て 2019 年より実施している事業である。

本事業ではボッチャ体験会に加え、①障害者スポーツに関する知識の提供（学習機会）、②スポーツが苦手な人に対するスポーツの有用性、価値への理解浸透、意識変革、③スポーツ普及を通じた障害者への理解促進、偏見などの減少、④社会的価値の醸成（学術的価値）を有するプログラムとしている。

2019 年度は、静岡県内の小・中学校から全 15 校、約 1200 名の児童・生徒および教員が参加した。実施状況については、当財団発行の“2019（令和元）年度 障害者スポーツを巻き込む社会的環境に関する調査研究”報告書を参照いただきたい。

<https://www.ymfs.jp/project/culture/survey/013-social-environment/>

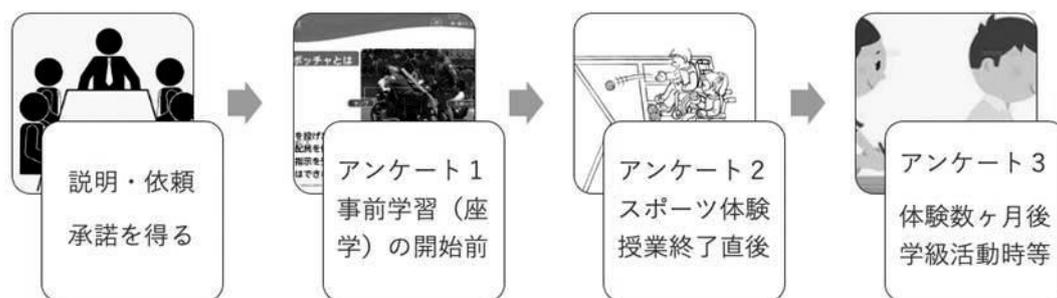
2 目的

本調査は、2020 年度より順次施行される新しい学習指導要領の理念を実現し、スポーツを通じた共生社会等を実現するための教育内容検討基礎資料を得ることを目的とした。新学習指導要領にはパラリンピック教育が明示され、児童生徒の意識のみならず多様な行動変容につながるような教育を進めることとなっている。そこで「チャレンジ！ユニ★スポ」の教育内容で子どもたちの意識や行動がどのように変容するのかを、先行研究（澤江ら 2018, 宮原 2017, 齊藤ら 2016）から導いた仮説をもとに質問項目を設定し実施した。

3 方法

事前学習（座学）とポッチャ（体験）を通して、子どもたちの障害や障害者スポーツ等に関する意識や視点がどのように変化するかを研究仮説に基づいて分析した。

調査の流れを図に示した。



まず、参加校において説明と依頼をし承諾を得た。次に事前学習前の意識調査（アンケート 1 回目）を実施し、のちに各校において事前学習を実施した。その後ポッチャを教材とした体験学習を実施し、体験学習終了時に意識調査（アンケート 2 回目）を行った。さらに、体験学習後数か月経過後に意識調査（アンケート 3 回目）を実施した。なお、新型コロナウイルス感染症の影響で 3 回目の意識調査が実施できない参加校についてはアンケート 2 までを回収し、全体の分析対象とせず、学校別の分析とフィードバックを実施した。

3. 1 参加者

2019年度の「チャレンジ！ユニ★スポ」に応募し、調査協力の同意を得た静岡県内15校の児童生徒1143名が参加した。

3. 2 アンケート調査

アンケートは、①「事前学習前」用、②「体験会参加直後」用、③「体験会から2～3か月経過後」用の3種類であるが、いずれも共通する調査項目を設定している(表3-1)。同一対象者へ期間中に3回の回答を依頼した(調査用紙は巻末付録参照)。

アンケート実施にあたっては、以下について補足説明を加えた。

- ・アンケートへの協力は強制でなく任意である。
- ・回答者コードは、外部には回答者を特定できない配慮を加えた個別識別コード設定となっており、児童生徒自身で設定する仕組みである。記入は児童生徒の意思を尊重するが、可能な範囲で協力してほしい。
- ・調査結果発表時に回答者個人を特定する情報は一切含まれない。

・「必ず3つ選んでください」と指示している一部の設問では、児童生徒からの質問が想定される。例えば、「2つしか該当項目がない。すべてが当てはまる。どれも当てはまらない」などである。その場合は「自分の気持ちに近い順に上から3つ選んで○を」という回答を教師に依頼した。

表 3-1 調査項目と実施時期

質問項目	事前	直後	数か月後
障害のある人との距離感	○	○	○
東京 2020 オリンピック・パラリンピックへの興味	○		
知っている障害者スポーツ種目	○		
ボッチャの感想		○	
障害者イメージ	○	○	○
障害者スポーツイメージ	○	○	○
アダプテッドの主体性	○	○	○
アダプテッドの適用度	○	○	○

3. 3 事前学習

事前学習には、国際パラリンピック委員会の公認教材である『I'm POSSIBLE (アームポッシブル)』を使用した。教材についてはスライド、ワークシート、動画を提供し、協力校に実施を依頼した。なお、教材はいずれも TOKYO 2020 for KIDS ウェブサイト (<https://education.tokyo2020.org/jp/>) の東京 2020 教育プログラムからダウンロード可能である。

表 3-2 事前学習で使ったスライド

スライド
① 『パラリンピックってなんだろう?』(必須)
② 『ボッチャをやってみよう』(必須) P13 まで座学にて依頼 P14 以降は体験会にて説明
③ 「公平について考えてみよう」(任意)
④ 「東京 2020 パラリンピックを楽しもう」(任意)

表 3-3 事前学習で使用した動画

動画

- ① 『リオ 2016 パラリンピックダイジェスト (3分34秒)』 (必須)
- ② 「ボッチャ競技説明 (2分38秒)」 (任意)
- ③ 『ボッチャをやってみよう (5分10秒)』 (必須)
- ④ 「(教員用) ボッチャ授業の進め方 (4分53秒)」 (参考)

4 結果・考察

4.1 障害のある人との距離感

ここでは「障害のある人と仲良くできる?」「障害のある人と一緒にスポーツできる?」「一緒にスポーツすれば障害のある人と友達になれそう?」という3つの質問に「はい」「いいえ」「わからない」で回答してもらった。図3-1はその結果を小学生と中学生でそれぞれ示したものである。

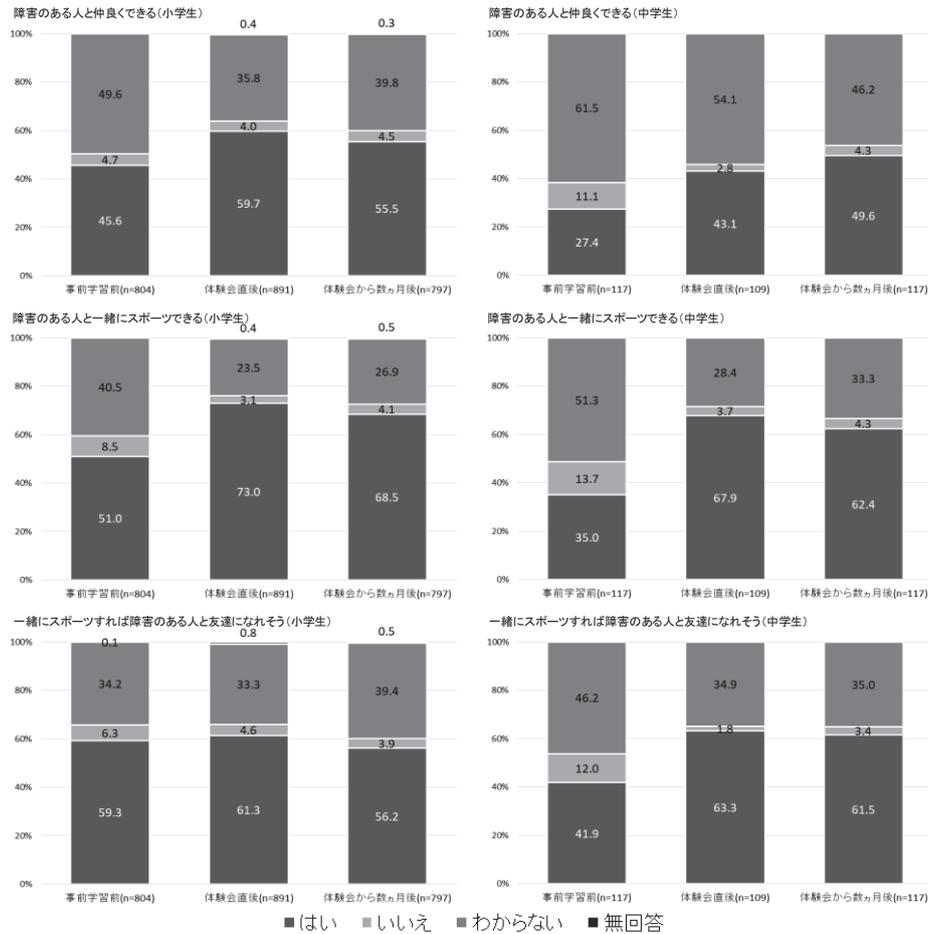


図 3-1 障害のある人との距離感

いずれの項目も、実施前よりも実施後に「はい」の回答割合が増え、一定期間を経過してもその意識が定着していることが示された。回答に変化を示したのは、「わからない」と回答していた児童生徒であり、事前学習とボッチャというスポーツの体験をすることで障害のある人との具体的な関わり方のイメージが持てるようになったと考えられる。また、「いいえ」という回答も一定の割合で存在することが示された。

4. 2 東京 2020 オリンピック・パラリンピックへの興味

東京 2020 オリンピック・パラリンピックへの興味について、どちらも興味がある、オリンピックだけ興味がある、パラリンピックだけ興味がある、どちらも興味なしからの選択回答とした（図 3-2）。

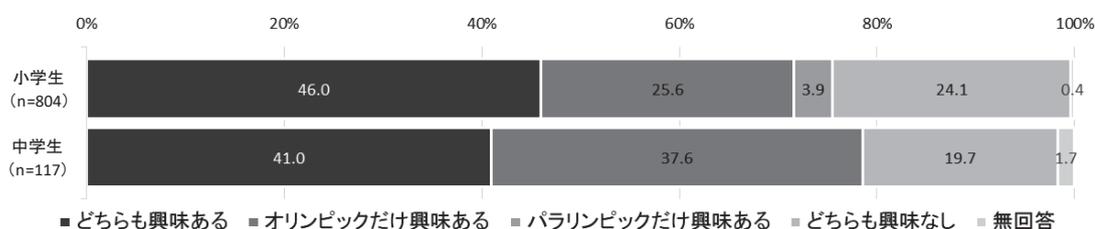


図 3-2 東京 2020 オリンピック・パラリンピックへの興味

小学生、中学生ともに「どちらも興味がある」が最も多く、次いで「オリンピックだけ興味がある」という結果であった。また、「パラリンピックのみ興味がある」という回答は小学生にだけ見られ、「どちらにも興味なし」も 2 割程度示された。

4. 3 知っている障害者スポーツ種目

自由記述とした。車いすバスケットボール、ボッチャなどが挙げられており、無回答は381件だった（表3-4）。

表 3-4 知っている障害者スポーツ種目（自由記述）

競技名	件数 (n921)
車いすバスケットボール	332
ボッチャ	262
サッカー	61
シッティングバレーボール	61
陸上競技	51
車いすテニス	49
競泳	33
自転車	26
車いすラグビー	23
卓球	20
ゴールボール	18
マラソン	12
アーチェリー	9
トライアスロン	9
バドミントン	7
その他	48
無回答	381

4. 4 ボッチャの感想

体験会直後の感想として、思っていたより面白かった、思っていたとおりであった、思っていたほど面白くなかった、面白くなかったという面白さを問う選択肢と「友達とボッチャをやってみたい」「ボッチャ以外の障害者スポーツをやってみたい」という興味の広がりについての選択肢を設定した（表3-5）。

表 3-5 ボッチャの感想

上段:実数 下段:割合(%)	全体	思っていたより面白かった	友達とボッチャをやってみたい	ボッチャ以外の障害者スポーツをやってみたい	思っていたとおりであった	思っていたほど面白くなかった	面白くなかった	無回答
全体	1000	876	676	675	94	22	19	6
	100.0	87.6	67.6	67.5	9.4	2.2	1.9	0.6
小学校	891	777	617	624	83	22	19	6
	100.0	87.2	69.2	70.0	9.3	2.5	2.1	0.7
中学校	109	99	59	51	11	-	-	-
	100.0	90.8	54.1	46.8	10.1	-	-	-

複数回答の結果、思っていたより面白かった（全体 876 件,87.6%）が最も多く、次いで友達とボッチャをやってみたい(676 件,67.6%)、ボッチャ以外のスポーツをやってみたい(675 件,67.5%)であった。事前学習と体験会を通してボッチャの魅力を伝えることができたこと

が示された。しかし意識変容が行動変容を促す結果につながったかについての検証ができていない。その後児童生徒が実際にボッチャを実施した、ボッチャ以外のスポーツについて自ら調べた、ボッチャ以外のスポーツを実施した等の行動変容が生じたかについて追跡調査ができれば興味深い。

4. 5 障害者イメージ

障害者に対してどのようなイメージを持っているかを把握するために、「障害」から連想する用語として「困っている、個性的、手伝いが必要、不便なことがある、その人らしさ、リハビリ、自由に動けない、できることがある、車いす」の選択肢から3つを選択してもらい、3回の変化を見た。回答者ごとに選択肢の組み合わせをもとに得点化したのち、小学生と中学生別に平均値で比較検討した。数値はポジティブなイメージが高い方から3,2,1,0となる。その結果、小学生は事前学習前には 0.56 ± 0.80 (平均値 \pm 標準偏差)であったが、体験会直後には 0.71 ± 0.89 とポジティブな方向にイメージ変化があり、その傾向が数か月後も 0.71 ± 0.89 と継続することが示された。しかし中学生では事前学習前に小学生よりも高い数値 (0.83 ± 0.87) を示しており、変化は有意ではなかった (図 3-3)。

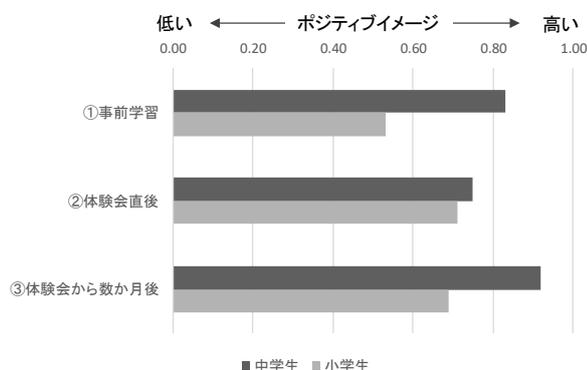


図 3-3 「障害」から連想するイメージ

4. 6 障害者スポーツイメージ

障害者スポーツから連想するイメージについて、「楽しそう、大変そう、チャレンジしてみたい、不便、激しい、障害者のためのもの」という選択肢より3つを選択してもらい、3回の変化を見た。回答者ごとに選択肢の組み合わせをもとに得点化したのち、小学生と中学生別に平均値で比較検討した。数値はポジティブなイメージが高い方から3,2,1,0となる。その結果、小学生は事前学習前 (1.34 ± 0.78) に比べ体験会直後 (1.56 ± 0.74) にポジティブなイメージ変化があり、その傾向が数か月後 (1.53 ± 0.77) まで継続することが示された。

また、中学生では事前学習前 (1.36±0.87) に比べ体験会直後 (1.43±0.76)、数か月後 (1.58±0.78) とポジティブなイメージ変化が示された (図 3-4)。

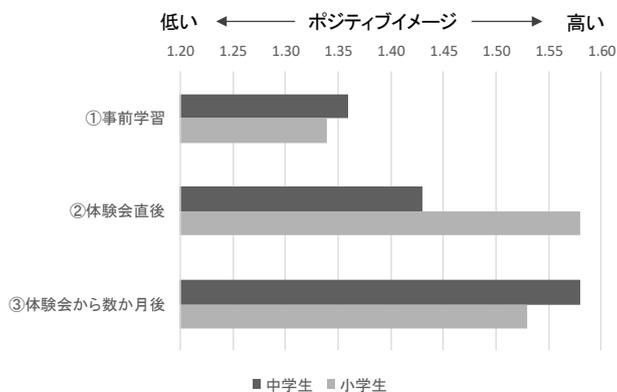


図 3-4 障害者スポーツのイメージ

4. 7 アダプテッドの自発性

障害のある友達とスポーツをするために必要なものとして、「障害者スポーツに詳しい先生やコーチ、スポーツのルールを変えること、障害者スポーツの本や資料、障害のある友達と相談すること、障害者スポーツ専用の道具や場所、サポートすること」という選択肢より3つを選択してもらい、3回の変化を見た。回答者ごとに選択肢の組み合わせをもとに得点化したのち、小学生と中学生別に平均値と標準偏差をもとに比較検討した。自らが主体的に関わっていこうとする意識をアダプテッドの自発性と捉え、数値は自発性が高い方から3,2,1,0となる。その結果、小学生、中学生ともに事前学習前 (平均値±標準偏差；小学生 1.41±0.67, 中学生 1.38±0.79)、体験会直後 (小学生 1.48±0.71, 中学生 1.46±0.76)、数か月後 (小学生 1.56±0.67, 中学生 1.54±0.69) と自発性が高まる傾向を示した (図 3-5)。

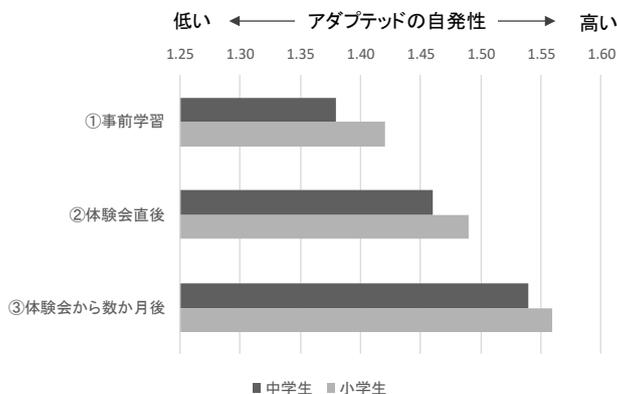


図 3-5 障害のある友達とスポーツをするために必要なもの

4. 8 アダプテッドの適用度

障害のある友だちとスポーツを楽しむために必要だと思うことを、体育授業での場面設定をもとに「友だちがうまくなるように練習をがんばってもらう、友だちも楽しめるようにルールを変える、あまりボールを渡さないようにしてあげる、みんなが車いすにのって車いすバスケットボールをする、無理をさせず得点係や応援で頑張ってもらう、ボールを使いやすいものに変える」という選択肢から3つを選んでもらい、3回の変化を見た。回答者ごとに選択肢の組み合わせをもとに得点化したのち、小学生と中学生別に平均値と標準偏差をもとに比較検討した。一緒に楽しむための配慮や工夫を必要な場面で適用しようとする意識をアダプテッドの適用度と捉え、数値は適用度が高い方から3,2,1,0となる。その結果、事前学習前（平均値±標準偏差；小学生 2.35±0.70, 中学生 2.50±0.73）、体験会直後（小学生 2.49±0.69, 中学生 2.51±0.69）、数か月後（小学生 2.54±0.68, 中学生 2.38±0.89）であった。アダプテッドの適用度に関しては、事前学習前から高い値を示したことから、本調査で用いた設問の場面設定を修正していくことが今後の課題となった（図 3-6）。

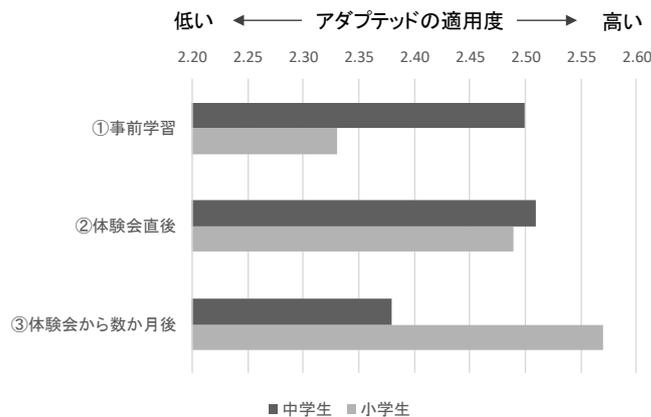


図 3-6 車いすの友達とバスケットボールを楽しむために必要だと思うこと

5 教員の反応

本調査に参加した教員を対象にアンケート調査を実施し、12校から回答を得た。調査項目は、事前学習教材について、児童生徒の変化について、ユニバーサルスポーツの有効性についてである（巻末資料参照）（表 3-6）。

事前学習教材については、使いやすさや児童生徒の理解という面で、どちらともいえないという回答が一定の割合で示されていることから、対象児の学年や内容についての検討を進めていきたい。

児童生徒の変化については、体験会そのものは好評であるが、教師が児童生徒の行動変容として実感できるまでには至っていない。

ユニバーサルスポーツとして共生社会の実現への有効性については、肯定的に捉えられていた。

表 3-6 事前学習・児童生徒の変化・ユニバーサルスポーツの有効性

調査項目	回答実数(n12)	思わない	やや思わない	どちらともいえない	ややそう思う	そう思う
<事前学習>						
事前学習教材は使いやすかったですか？		0	0	2	6	4
児童生徒は理解できているようでしたか？		0	0	3	4	5
<児童生徒の変化>						
ポッチャ体験会の内容は期待と合っていましたか？		0	0	0	1	11
スポーツの苦手な子も楽しく参加できていましたか？		0	0	0	1	11
スポーツの苦手な児童生徒が、またスポーツをやりたいと思うきっかけとなった。		0	0	2	5	5
体験会をきっかけに、日頃交流の少ない友達間や男女間での会話が增えた。		0	1	4	4	3
ケガや病気をした友達に対して、手助けをしようとする児童生徒が増えた。		0	0	9	2	1
パラリンピックを見たい(応援したい)という児童生徒が増えた。		0	0	1	6	5
<ユニバーサルスポーツの有効性>						
ポッチャ等のユニバーサルスポーツは、社会が求める共生社会実現に向けたスポーツ活用策として有用だと思われますか？		0	0	0	2	10

また、本調査研究以降に各校におけるポッチャなどのユニバーサルスポーツの実施状況と実施するにあたっての阻害要因（課題や解決すべき問題点）について回答してもらった。

実施したのは3件であり、実施内容はポッチャを複数回、ポッチャを1回、ゴールボールを1回であった。一方で、実施していないが6件あり計画が3件であった（表3-7）。

表 3-7 その後のユニバーサルスポーツ実施状況

	回答実数(n12)	実施した	実施していない	実施計画中
その後のユニバーサルスポーツ実施状況		3	6	3

実施するにあたっての阻害要因としては、用具・施設がないが7件とすべての回答者が指摘した。また用具を揃えるための予算措置・費用がかかる点が3件、ルールを知っている指導者がいないことも1件回答があった。ポッチャをはじめとするユニバーサルスポーツの有効性が評価される一方で、専門の用具がないことが実施の阻害要因となることが示された。車いすや特別な用具を使うことに特徴づけられるスポーツの場合は、保管場所やメンテナンス、予算等を考慮すると、各校で用具を揃えるよりも、ユニバーサルスポーツ拠点として地域ごとに用具を揃える拠点校を設け、単元計画に盛り込みながら計画的に用具を活用していく拠点校方式や、静岡県障害者スポーツ協会との連携で普及プログラムを作成して

いくことも現実的であろう。もちろん教育予算の獲得や補助金事業等で企業や地域資源と連携していくことも有効である。

本調査を実施するにあたっては学校関係者の協力が不可欠である。事前学習では、教員が配布された教材をもとに展開することから教員の教材観や扱い方も重要な要素である。ボッチャをはじめとするスポーツには、「アダプテッドの視点」が含まれる。児童生徒のみならず教員もそれを理解し、障害者スポーツ指導員による「出前授業・出前講座」から各校の教員による「自前授業・自前体験会」が展開できるよう、教員対象の研修も同時に進めていくことが求められる。

6 まとめ

本調査からは、事前学習、体験、振り返りという一連の学習内容が小学生においては障害のある人に対するイメージをポジティブな方向に変容させることが示された。また、中学生においては障害者スポーツのイメージをポジティブな方向に変容させることも示された。ボッチャを教材としたユニバーサルスポーツが、スポーツを通じた共生社会の実現という教育目標に合致した児童生徒の意識変容を促進する可能性も示唆されたが、行動変容をもたらすものであるかは今後の検証が必要である。一方で用具不足や予算の問題が阻害要因として示された。これらの課題に対しては拠点化・連携・出前から自前へという視座で解決していくことが望まれる。

本調査にご協力いただいた児童生徒の皆さん、事業の実施にご協力いただいた学校関係者ならびに、静岡県障害者スポーツ協会にお礼申し上げます。

(齊藤まゆみ)

【2020年度の“チャレンジ！ ユニ★スポ”の実施結果について】

2019年度にケーススタディーとして開始した“チャレンジ！ ユニ★スポ”であるが、生徒・先生からの感想やアンケート回答等から、ポッチャ体験を通じた障害者への理解促進やスポーツが苦手な人に対する有用性などが確認できたことから2020年度も公益財団法人静岡県障害者スポーツ協会（以下、「県協会」）の協力を得て継続実施した。

2020年度は年初より新型コロナウイルスが全国に広がっていったため、実施予定校とは個別に開催時期や実施方法とともに感染防止対策について打ち合わせを行い無事に開催を終了することができた。特に感染対策については、県からのガイドラインを基本に、県協会、講師をしていただいた障害者スポーツ指導員、開催校の先生方から現場視点にての感染防止のアイデアもいただき、順次取り入れた。これについてはご参考として以下（P84）にくつかをご紹介させていただく。

最終的に今年度は12校で開催し、約860名の参加者となった。昨年同様に学術的調査（意識変容調査）も実施することができ、昨年度の調査と合わせてより多くのデータが集まることで、客観的な効果が見えてくると期待している。

最後に今年度の開催にあたって多岐にわたりご協力をいただいた静岡県、県協会、静岡県障害者スポーツ指導者協議会および指導員の皆様、齊藤先生をはじめとする当財団障害者スポーツ・プロジェクトメンバー、そして本活動にご理解ご協力いただいた静岡県内の学校関係者の皆様にお礼申し上げます。

【活動結果】

	日程	学校名	参加者数		
			児童生徒 (特別支援対象児含む)	教員	合計
1	9月3日(木)	袋井市立袋井西小学校	76	3	79
2	9月8日(火)	菊川市立河城小学校	37	4	41
3	9月30日(水)	伊東市立東小学校	40	5	45
4	10月14日(水)	磐田市立磐田西小学校	95	5	100
5	10月20日(火)	磐田市立豊田東小学校	75	2	77
6	10月27日(火)	袋井市立山名小学校	145	4	149
7	11月4日(水)	掛川市立中小学校	22	2	24
8	11月10日(火)	浜松市立笠井小学校	81	3	84
9	11月12日(木)	御殿場市立朝日小学校	78	4	82
10	11月13日(金)	静岡市立由比小学校	43	4	47
11	12月4日(金)	浜松市立追分小学校	54	8	62
12	12月18日(金)	伊豆の国市立大仁小学校	68	3	71
合計			814	47	861

【感染防止】

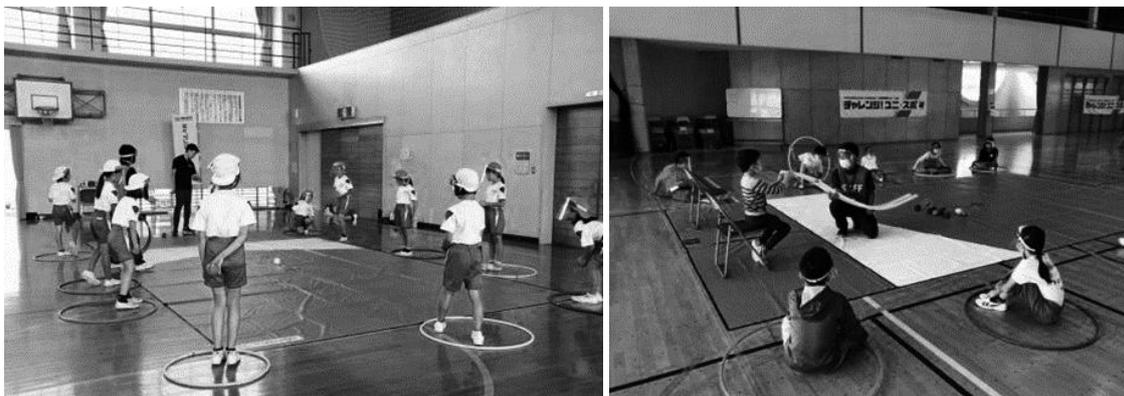
1) フェイスシールドの着用

体育の授業においては、熱中症防止ならびに密を避ける種目の選択にてマスク着用はしていない学校が多いようであるが、ポッチャ体験は屋内（体育館）で開催されること、そして面白さから声をあげる児童も多いことなどを考慮し、フェイスシールドの着用提案を行った。各学校の感染防止対策を基本として、希望校にはフェイスシールドを提供し着用していただいた。フェイスシールドを付けるという珍しさもあってか抵抗を感じる生徒は少なかったようである。なお、一部の学校ではマスクの着用のみ、またマスクとフェイスシールドの併用という所もあった。



2) フラフープの活用

先生から提案をいただいたアイデアとして、生徒間の距離を保つためのツールとしてフラフープの活用がある。参加した児童は小学校4年生が多く、友達と集まっておしゃべりがしたい年代である。これを避けるため投球順番待ちではフラフープの中にいることにし、密集を避けるようにした。



3) こまめな手の消毒

児童は1回投球が終わったら、その都度手の消毒を実施するようにした。各コートに消毒スプレーを準備して、指導員（もしくは指導員補助）が児童の手に塗布。当初はかなりの時間がとられると危惧していたが、実際にやってみると進行に影響なく実施することができた。また、体験会終了後、用具の消毒も実施した。



4) 指導員およびスタッフの感染防止対策

多くの児童と向き合う指導員と補助スタッフについては、以下の感染対策を実施した。

- ・体調チェックシート（P86 参照）に基づき、毎日の体調および体温を記録していただいた。

体験会の開催 2 週間以内に体調不良や発熱があった場合は参加を見送っていただく運用としたが、幸い本年度は該当する指導員には発生しなかった。また、体験会終了後も継続してチェックシートに記入いただくことで、その後の状況も追跡できるようにした。

・うつさない、うつされない、の徹底のためマスクとフェイスシールドの併用により、より安全な運営を目指した。課題としては、マスクにより声が通りにくくなること、冬場になるとシールド内が曇りやすくなること（特に眼鏡着用の人）がある。

・体験会実施中の密を回避することに注意して指導を行った。特に、児童に対する説明や指導にあたっては、児童が密集しないように気を付けながら進めた。例えば、どちらのボールがジャックボールに近いかなどを見る場合、昨年度までは生徒みんなを集めて見てもらっていたが、本年度は各チームの代表2人に順番で確認をしてもらうなどの方法をとった。

体調チェックシート

X 月

氏名: _____

ユニスポ等派遣事業実施にあたり、派遣指導員の皆様には新型コロナウイルス感染症の感染防止のため、毎日の体調チェックをお願いします。

症状リスト

①平熱を超える発熱 ②咳 ③のどの痛み ④倦怠感(だるさ) ⑤息苦しさ ⑥嗅覚や味覚の異常

⑦その他(具体的症状は各日の欄にご記入ください)

毎日の体調を記入してください。

記入日	体温	体調	不調の場合の具体的な症状 上記 症状リストの番号 ①～⑦をご記入ください。	記入日	体温	体調	不調の場合の具体的な症状 上記 症状リストの番号 ①～⑦をご記入ください。
1日	℃	<input type="checkbox"/> 良好 <input type="checkbox"/> 不調		15日	℃	<input type="checkbox"/> 良好 <input type="checkbox"/> 不調	
2日	℃	<input type="checkbox"/> 良好 <input type="checkbox"/> 不調		16日	℃	<input type="checkbox"/> 良好 <input type="checkbox"/> 不調	
3日	℃	<input type="checkbox"/> 良好 <input type="checkbox"/> 不調		17日	℃	<input type="checkbox"/> 良好 <input type="checkbox"/> 不調	
4日	℃	<input type="checkbox"/> 良好 <input type="checkbox"/> 不調		18日	℃	<input type="checkbox"/> 良好 <input type="checkbox"/> 不調	
5日	℃	<input type="checkbox"/> 良好 <input type="checkbox"/> 不調		19日	℃	<input type="checkbox"/> 良好 <input type="checkbox"/> 不調	
6日	℃	<input type="checkbox"/> 良好 <input type="checkbox"/> 不調		20日	℃	<input type="checkbox"/> 良好 <input type="checkbox"/> 不調	
7日	℃	<input type="checkbox"/> 良好 <input type="checkbox"/> 不調		21日	℃	<input type="checkbox"/> 良好 <input type="checkbox"/> 不調	
8日	℃	<input type="checkbox"/> 良好 <input type="checkbox"/> 不調		22日	℃	<input type="checkbox"/> 良好 <input type="checkbox"/> 不調	
9日	℃	<input type="checkbox"/> 良好 <input type="checkbox"/> 不調		23日	℃	<input type="checkbox"/> 良好 <input type="checkbox"/> 不調	
10日	℃	<input type="checkbox"/> 良好 <input type="checkbox"/> 不調		24日	℃	<input type="checkbox"/> 良好 <input type="checkbox"/> 不調	
11日	℃	<input type="checkbox"/> 良好 <input type="checkbox"/> 不調		25日	℃	<input type="checkbox"/> 良好 <input type="checkbox"/> 不調	
12日	℃	<input type="checkbox"/> 良好 <input type="checkbox"/> 不調		26日	℃	<input type="checkbox"/> 良好 <input type="checkbox"/> 不調	
13日	℃	<input type="checkbox"/> 良好 <input type="checkbox"/> 不調		27日	℃	<input type="checkbox"/> 良好 <input type="checkbox"/> 不調	
14日	℃	<input type="checkbox"/> 良好 <input type="checkbox"/> 不調		28日	℃	<input type="checkbox"/> 良好 <input type="checkbox"/> 不調	

※派遣日当日は、チェックシートを持参ください。
ご協力よろしくお願いいたします。

(公財)静岡県障害者スポーツ協会
TEL: 054-221-0062
メール: s-spokyo@za.tnc.ne.jp

【活動の様子】



児童の意識変容

【参加した児童の感想文より】

ホッチャをやっている時に、きゅくてんできて、すごくうれしかったよ。はじめて、ほんもののホッチャをやれて、すごくうれしかったよ。
⑨しょうがいがある人と、いっしょにホッチャをやりたいと思ったよ。ホッチャのボール、すごくおもかったよ。言葉をきいていたら、家でもホッチャのボールが、できるって、きいたから、家でつくって、家でもホッチャをやりたいと思ったよ。わたしは、いっしょにホッチャのことをしれて、うれしかったよ。
わたしは、やっていると、思ったんだけど、しょうがいがある人は、ホッチャをやっていると、すごいと思ったよ。ほんとうはオリンピックとか、しか、きょうみがなかったけど、パラリンピックも、みてみたいなって、思ったよ。はじめて、ランプをつかってやってみたけど、しょうがいがある人には、ランプをつかってやるのは、はじめて、しつたよ。すごくうれしかったよ。家に帰ったら、まうちの人に、も、いったよ。おうちの人も、「やってみたいな、ホッチャ」といっていたよ。いっしょに、たいくつしてみたいよ。ホッチャは、しょうがいがある人も、スポーツをたのしんで、やってもいいから、ホッチャがある人だ、って、思、ったよ。また、ホッチャをやってみて、

わたしはボッチャをたいけんしてしょうがいしゃでも楽しめるんだなと思いました。パラリンピックを見てみたいと思いました。お家でもお父さんとお母さんに話したら、「すごいね、よかったね」と言ってくれました。ボッチャはしょうがいしゃでもしょうがいがない人でも楽しめるスポーツだったからとても楽しかったです。負けたらちょっとくやしけど、かったらとてもうれしいです。とても楽しかったからお家でも家族でやってみてみたいと思いました。

わたしは、しょうがいがある人のためのスポーツ(パラスポーツ)にきょうみをもちました。ボッチャはうんどうが「苦」でな人でもたのしめる物だと思います。わたしはもっとも、パラスポーツをしたいです。とパパとママとやってみまね!

ボ、キヤをやってみてたのしか、たしいい
るけんしゅうでや、てないともや、たから
ち、としんばいしました。おかあさ
んにいた。だけどボ、キヤ、てない。て
きかされましたでじゅうんていってみたら
目がみえなひともあしが、じゅうた
人でもできるボ、キヤ、ていたらだれで
もかんたんにできちゃうの。ていってから
わたしはこうたまましただれでもでき
るお、パーティーだ、ていきました。でも
ボ、キヤはおじいちゃんもおばあさんもみ
んなできるんてしらないか、たですも
、とボ、キヤのことをもっとしりたいです
また、は、いやりたいたいです。

◎世が、じゅうんていとかでできるんた、とおも
った。

ボッチャは思ったよりいいルールが
 ありました。ぼくは最初むずかしい
 と思ったけれどやってみたらすごくおもしろ
 かったです。これならしょうがい者でも
 ボッチャができるなと思いました。だから
 ぼくはヨーロッパの人たちはしょうがい者で
 も楽しくできるスポーツを考えてやせ
 いなと思いました。しょうがい者のた
 めのルールがいろいろありました。たと
 えは手が不自由な人は足でけたりそ
 ういうルールがあるとだれでも楽しく
 できます。ボッチャだけじゃなくて車いす
 バスケやテニスとかいろいろしょうがい者
 がやるスポーツがあるからしょうがい者
 にとってもうれしいのかもかもしれないと思いま
 した。

①ぼくは、じょういボッチャをやってみて
しょうがいのある人でも、しょうがいしゃ
じゃなくても、これならだれでもたの
しめるきょうぎだしボッチャをおしえて
くれた人は、ボッチャをたくぎんしてしましいか
ら、がんばっている。だから、ぼくは、
ボッチャをやってみてよかったとおもった。

しょうがいしゃの人がやるスポーツ
があるんだなと思いました。
ボッチャをやる事になつて少しできな
いんしゃないかとふあんだだけど
やってみたら楽しかったし負けた時
くやしかったけどボッチャをやつてよかつ
たなと思いました。自分としては、
いろいろな事を学んだなと思いまし
た。たとえばしょうがいしゃのためになら
いろいろ工夫してあつて自分しゃないだれか
のためにならという事を学べました。

わたしは、ポッチャを書き、楽しんでたです。
 がぞくみんなに、自まつては、べんきょう
でしらべて、自学に書き、なつめ先生とや
 ったにせポッチャで、もすごく楽しんでたです。
 ほんものポッチャでは、先生もやさしくおし
 えてくれて、たがりました。もしこわい先生だ
 たら、もう、え彦頁で、やれなかつたと思いま
 す。でもやさしい先生がいてくれた
 から、え彦頁で楽しくてきました。さいしょ
 は、うまくできなかつたけど、だんだんた
 れてきて、もともお————と
 と楽しくてきました。ボールの作り方ももら
 ったので、こんど作ってみます。すごく楽しか
 ったからちがうものもやりたいです。

ぼくは、ボッチャをできてとてもうれしかったです。
負けても楽しくてぎくめんしたときはとてもうれしかった
たです。

ボッチャで楽しんで、こんなやり方などは知りませんでした。
あの2時間があつといまにすぎていってもっともとやリた
らたです。

ぼくはボッチャがとても好きになりました。

⑥ 教えた方にもう一つ「ありがとう」といいたかった
です。

わたしはボッチャをはじめてやりま
したそれで相手のチームとやったら
時、0点と3点でまけちゃたけどすごく
ものすごくたのしかったです。

またやリたいなと思ひました。

さいしよはボッチャでなんだろう？

て思ひたけどルールもよくわかつたからもボッ
チャのことがもりたいなー。と思ひます。

ボッチャはしょうがいのある人までたのしめ
るからいいスポーツだかんしんしました。

わたしは、しょうがいしゃスポーツは、
しょうがいしゃの人のためにもあるし、
しょうがいのない人もたのしめて、みんな
えがおになって、負けた人もかた人も、
みんなえがにならなくて「すごい」と思
いました。ボッチャのほかにも、
すいえいや、テニス、はしりはばとび、
とかいろいろあったのでもっとしりたいです。
しょうがいしゃの人をタタいから、
しょうがいしゃスポーツがあると、思
います。

②しょうがいがある人も楽しめる
スポーツだと思いました。

わたしも「ボッチャ」をやってみて
すごく楽しいなあと思いました。

だから「ボッチャ」を体けんできて
よかったです。

わたしは「パラリンピック」ということ
を知らませんでした。「ボッチャ」とい
うきょうぎを聞いたこともありません
でした。でも「ボッチャ」を体けん
しておもしろかったし、楽しかったです。

「パラリンピック」ってこんなことする
んだあと思いました。

わたしは「ボッチャ」をもっとやってみ
たいし、「パラリンピック」に
きょうみをもちました。

「ボッチャ」楽しかったです。

【今後に向けて】

昨年度実施した意識変容調査の結果からも事前学習や体験会を通して、年齢や性別、運動能力、障害の有無にかかわらず、誰もが仲良く相互理解を深めることのできるユニバーサルな価値を有することが確認できた。一方、どの学校も継続して体験会を実施したいと思っはいるものの、用具がない、簡単に借りられる所もない、用具が高価であり簡単に購入できない、指導者が身近にいない等の理由から、その後継続して実施した学校は数校に留まっている。安価で手に入れられる用具の開発により、児童が日常的にユニバーサルスポーツができるようになることを期待したい。当財団としても、今後もさらなるプログラム内容の充実を図っていきたいと考えている。

(大庭義隆)

付録 ユニ・スポ調査票

『チャレンジ！ ユニ★スポ』^{かいめ} 1回目アンケート』^{じぜんがくしゅうまえ} (事前学習前)

Q1. あなたの性別は？ (どれかに○) ^{せいべつ} ^{まる} ^{おとこ} 男 ^{おんな} 女 ^{こたえたくない} こたえたくない

Q2. 学校名と学年は？ ^{がっこうめい} ^{がくねん} ^{しょう} ^{ちゅうがっこう} ^{ねんせい} 小・中学校 年生

Q3. 次の文を読んで、あなたの気持ちに近いものに○をつけてください。(どれかに○)

- 1) 障害のある人と仲良くできる？
はい ・ いいえ ・ わからない
- 2) 障害のある人と一緒にスポーツできる？
はい ・ いいえ ・ わからない
- 3) 一緒にスポーツすれば障害のある人と友達になれそう？
はい ・ いいえ ・ わからない

Q4. 東京2020 オリンピック・パラリンピックに興味ありますか？ (どれかに○)

- () どちらも興味ある () オリンピックだけ興味ある
() パラリンピックだけ興味ある () どちらも興味なし

Q5. 知っている障がい者スポーツがあれば種目名を書いてください。(知っている人だけ)

Q6. 「障害」から連想するイメージを以下から必ず3つ選んでください。(3つに○)

- () 困っている () 個性的 () 手伝いが必要
() 不便なことがある () その人らしさ () リハビリ
() 自由に動けない () できることがある () 重いです

Q7. 「障害者スポーツ」から連想するイメージを以下から必ず3つ選んでください。

- () 楽しそう () 大変そう () チャレンジしてみたい
() 不便 () 激しい () 障害者のためのもの

※質問は裏にもあります。裏に進んでください。

Q8. 障害のある友達とスポーツする為に必要なものを以下から必ず3つ選んでください。

- () 障害者スポーツに詳しい先生やコーチ () スポーツのルールを変えること
- () 障害者スポーツの本や資料 () 障害のある友達と相談すること
- () 障害者スポーツ専用の道具や場所 () サポートすること

Q9. 体育の授業でバスケットボールの試合をすることになりました。自分のチームメイトに居る「車いすに乗っている、手足をうまく動かせない友だち」と一緒にバスケットを楽しむために必要だと思うことを以下から必ず3つ選んでください。(3つに〇)

- () 友だちがうまくなるように、練習をがんばってもらう
- () 友だちも楽しめるように、ルールを変える
- () あまりボールを渡さないようにしてあげる
- () みんなが車いすにのって、車いすバスケットをする
- () 無理をさせず、得点係や応援で頑張ってもらう
- () ボールを使いやすいものに変える

※ここからはあなたのコードづくりです。書きたくなければ書かなくても構いません。

<書き方は以下を参考にしてください>

- あなたの苗字の最初の文字 : 苗字 山田 (やまだ) → **や**
- あなたの名前の最初の文字 : 名前 花子 (はなこ) → **は**
- 誕生日 : 8月 → **8**
- 誕生日の最初の数字 : 25日 → **2**
- 出席番号の下2桁 : 350番 → **50**

あなたの苗字の最初の文字(平がな)	あなたの名前の最初の文字(平がな)	誕生日	誕生日の最初の数字	出席番号の下2桁
や	は	8	2	50

上の説明を読んで、以下の欄に記入してください。

あなたの苗字の最初の文字(平がな)	あなたの名前の最初の文字(平がな)	誕生日	誕生日の最初の数字	出席番号の下2桁

『チャレンジ！ ユニ★スポ』 2回目アンケート (体験会直後)

Q1. あなたの性別は？ (どれかに○) 男 女 こたえたくない

Q2. 学校名と学年は？ _____ 小・中学校 _____ 年生

Q3. 次の文を読んで、あなたの気持ちに近いものに○をつけてください。(どれかに○)

- 1) 障害のある人と仲良くできる？
はい ・ いいえ ・ わからない
- 2) 障害のある人と一緒にスポーツできる？
はい ・ いいえ ・ わからない
- 3) 一緒にスポーツすれば障害のある人と友達になれそう？
はい ・ いいえ ・ わからない

Q4. ボッチャの感想であなたの気持ちに近いものに○をつけてください。(いくつでも)

- () 思っていたより面白かった () 思っていたとおりがたかった
- () 思っていたほど面白くなかった () 面白くなかった
- () 友達とボッチャをやってみたい () ボッチャ以外の障害者スポーツをやってみたい

Q5. 「障害」から連想するイメージを以下から必ず3つ選んでください。(3つに○)

- () 困っている () 個性的 () 手伝いが必要
- () 不便なことがある () その人らしさ () リハビリ
- () 自由に動けない () できることがある () 重いです

Q6. 「障害者スポーツ」から連想するイメージを以下から必ず3つ選んでください。

- () 楽しそう () 大変そう () チャレンジしてみたい
- () 不便 () 激しい () 障害者のためのもの

※質問は裏にもあります。裏に進んでください。

Q7. 障害のある友達とスポーツする為に必要なものを以下から必ず3つ選んでください。

- () 障害者スポーツに詳しい先生やコーチ () スポーツのルールを変えること
- () 障害者スポーツの本や資料 () 障害のある友達と相談すること
- () 障害者スポーツ専用の道具や場所 () サポートすること

Q8. 体育の授業でバスケットボールの試合をすることになりました。自分のチームメイトに居る「車いすに乗っている、手足をうまく動かせない友だち」と一緒にバスケットを楽しむために必要だと思うことを以下から必ず3つ選んでください。(3つに○)

- () 友だちがうまくなるように、練習をがんばってもらう
- () 友だちも楽しめるように、ルールを変える
- () あまりボールを渡さないようにしてあげる
- () みんなが車いすにのって、車いすバスケットをする
- () 無理をさせず、得点係や応援で頑張ってもらう
- () ボールを使いやすいものに変える

※ここからはあなたのコードづくりです。書きたくなければ書かなくても構いません。

<書き方は以下を参考にしてください>

- あなたの苗字の最初の文字 : 苗字 山田 (やまだ) → や
- あなたの名前最初の文字 : 名前 花子 (はなこ) → は
- 誕生日 : 8月 → 8
- 誕生日の最初の数字 : 25日 → 2
- 出席番号の下2桁 : 350番 → 50

あなたの苗字の最初の文字(平かな)	あなたの名前最初の文字(平かな)	誕生日	誕生日の最初の数字	出席番号の下2桁
や	は	8	2	50

上の説明を読んで、以下の欄に記入してください。

あなたの苗字の最初の文字(平かな)	あなたの名前最初の文字(平かな)	誕生日	誕生日の最初の数字	出席番号の下2桁

『チャレンジ！ ユニ★スポ』3回目アンケート (体験会から数ヵ月後)

Q1. あなたの性別は？ (どれかに○) 男 女 こたえたくない

Q2. 学校名と学年は？ _____ 小・中学校 年生

Q3. 次の文を読んで、あなたの気持ちに近いものに○をつけてください。(どれかに○)

- 1) 障害のある人と仲良くできる？
はい ・ いいえ ・ わからない
- 2) 障害のある人と一緒にスポーツできる？
はい ・ いいえ ・ わからない
- 3) 一緒にスポーツすれば障害のある人と友達になれそう？
はい ・ いいえ ・ わからない

Q4. 「障害」から連想するイメージを以下から必ず3つ選んでください。(3つに○)

- () 困っている () 個性的 () 手伝いが必要
- () 不便なことがある () その人らしさ () リハビリ
- () 自由に動けない () できることがある () 車いす

Q5. 「障害者スポーツ」から連想するイメージを以下から必ず3つ選んでください。

- () 楽しそう () 大変そう () チャレンジしてみたい
- () 不便 () 激しい () 障害者のためのもの

Q6. 障害のある友達とスポーツする為に必要なものを以下から必ず3つ選んでください。

- () 障害者スポーツに詳しい先生やコーチ () スポーツのルールを変えること
- () 障害者スポーツの本や資料 () 障害のある友達と相談すること
- () 障害者スポーツ専用の道具や場所 () サポートすること

※質問は裏にもあります。裏に進んでください。

Q9. 体育の授業でバスケットボールの試合をすることになりました。自分のチームメイトに居る「車いすに乗っている、手足をうまく動かせない友だち」と一緒にバスケットを楽しむために必要だと思うことを以下から必ず3つ選んでください。(3つに○)

- () 友だちがうまくなるように、練習をがんばってもらう
- () 友だちも楽しめるように、ルールを変える
- () あまりボールを渡さないようにしてあげる
- () みんなが車いすにのって、車いすバスケットをする
- () 無理をさせず、得点係や応援で頑張ってもらう
- () ボールを使いやすいものに変える

※ここからはあなたのコードづくりです。書きたくなければ書かなくても構いません。

<書き方は以下を参考にしてください>

- あなたの苗字の最初の文字 : 苗字 山田 (やまだ) → や
- あなたの名前の最初の文字 : 名前 花子 (はなこ) → は
- 誕生月 : 8月 → 8
- 誕生日の最初の数字 : 25日 → 2
- 出席番号の下2桁 : 350番 → 50

あなたの苗字の最初の文字(平かな)	あなたの名前の最初の文字(平かな)	誕生月	誕生日の最初の数字	出席番号の下2桁
や	は	8	2	50

上の説明を読んで、以下の欄に記入してください。

あなたの苗字の最初の文字(平かな)	あなたの名前の最初の文字(平かな)	誕生月	誕生日の最初の数字	出席番号の下2桁

『チャレンジ！ユニ★スポ』先生向けアンケート（開催終了後）

学校名 _____

回答者氏名 _____

* 5段階評価については、下記を目安にご回答ください。（該当に○）

←5(はい/良い)・4・3(普通/何とも言えない)・2・1(いいえ/悪い)→

Q1. 事前学習について

- 1) 事前学習教材は使いやすかったですか？ (←5・4・3・2・1→)
- 2) 児童/生徒は理解できているようでしたか？ (←5・4・3・2・1→)

Q2. ボッチャ体験会について

- 1) 体験会の内容は期待と合っていましたか？ (←5・4・3・2・1→)
- 2) スポーツの苦手な子も楽しく参加できていましたか？ (←5・4・3・2・1→)

Q3. 『チャレンジ！ユニ★スポ』による児童/生徒の変化について

- 1) スポーツの苦手な児童/生徒が、またスポーツをやりたいと思うきっかけとなった。
(←5・4・3・2・1→)
- 2) 体験会をきっかけに、日頃交流の少ない友達間や男女間での会話が aumentata。
(←5・4・3・2・1→)
- 3) ケガや病気をした友達に対して、手助けをしようとする児童/生徒が増えた。
(←5・4・3・2・1→)
- 4) パラリンピックを見たい(応援したい)という児童/生徒が増えた。
(←5・4・3・2・1→)

Q4. その後、学校でボッチャなどのユニバーサルスポーツを実施されましたか？

- 1) 実施した (実施種目: _____ 実施回数: _____ 回)
- 2) 実施していない
- 3) 計画中である

Q5. ボッチャ等のユニバーサルスポーツは、社会が求める共生社会実現に向けたスポーツ活用策として有用だと思われますか？

(←5・4・3・2・1→)

Q6. 学校にて独自にユニバーサルスポーツを実施しようとした場合、実施にあたっての課題や解決すべき問題点等があればお教えてください。

ご協力ありがとうございました。

調査報告書の各種データについて

本報告書の各種データは当財団ホームページにて公開しています。

報告書の PDF データの他に、調査票データ等も公開予定です。

y m f s
🔍 検索

約 29,900 件 (0.40 秒)

公益財団法人 ヤマハ発動機スポーツ振興財団 Click

公益財団法人 ヤマハ発動機スポーツ振興財団(YMFS)はスポーツを通じて、夢の実現にチャレンジする人を応援しています。

- スポーツチャレンジ助成事業**
スポーツチャレンジ助成事業。このページをシェア。スポーツとその周辺...
- スポーツ教材の提供**
心身ともに健全な子どもたちの育成を目的として、スポーツ教材の提供を...
- YMFSについて**
ヤマハ発動機 公益財団法人 YMFS 振興 助成 奨学金 障害者スポーツ...

[ymfs.jpからの検索結果 >](#)

公益財団法人 ヤマハ発動機スポーツ振興財団
Yamaha Motor Foundation for Sports

・目的について ・スポーツチャレンジ助成事業 ・スポーツチャレンジ助成事業 ・スポーツチャレンジ助成事業

平成28年度 調査研究 調査研究報告書 配信中

- スポーツ教材の提供
- 市民の健康づくり
- シニアスポーツスクールの推進
- セーリング・チャレンジカップ 助成事業
- 助成事業について
- スポーツチャレンジ助成
- スポーツチャレンジ助成
- 調査研究
- チャレンジライブラリー

Click

2020（令和2）年度
障害者スポーツを取巻く社会的環境に関する調査研究
－ 障害者スポーツ選手キャリア、コロナ禍の影響、ユニ・スポ体験の効果に着目して －

2021年3月 発行

発行者 公益財団法人ヤマハ発動機スポーツ振興財団

Yamaha Motor Foundation for Sports (YMFS)

〒438-8501 静岡県磐田市新貝 2500

TEL 0538-32-9827 FAX 0538-32-1112

I S B N 978-4-9910824-2-9

© ヤマハ発動機スポーツ振興財団

本報告書の内容を引用された場合、その掲載部分の写しをYMFSにご送付ください。



公益財団法人
ヤマハ発動機スポーツ振興財団
Yamaha Motor Foundation for Sports

ISBN 978-4-9910824-2-9

2020(令和2)年度
障害者スポーツを取巻く社会的環境に関する調査研究

- 障害者スポーツ選手キャリア、コロナ禍の影響、ユニ★スポ体験の効果、に着目して -